
創甲道化織鐵

植木屋工房

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

創甲道化織鐵

【Nコード】

N3727Y

【作者名】

植木屋工房

【あらすじ】

インフィニット・ストラトスと呼ばれるパワースーツの開発と重要度の偏重により、女尊男卑の社会となった世界。

ISの操縦者を教育するIS学園では、クラス代表を決める決定戦が行われていた。

戦闘は進み、激しさを増し、互いの技量と強さを認め合う篠ノ之箒とセシリア・オルコットを謎のISが襲撃する。

激戦にて疲労困憊の二人をさらに甚振る謎のIS。

そして、突如出現する謎の黒い穴。ワームホール

その穴から膨大な量の白髪を伸ばした謎の男が流星の如く現出し、舞台は更に混迷を極める。

謎の男に箒とセシリアは思考停止し、千冬は懐かしさと焦燥を感じていた。

千冬は男に、いなくなってしまった弟の姿を透かしていた。

織斑一夏がいなくなった世界に現れた、奇矯な劔冑を纏う男。

それは、インフィニット・ストラトスの世界を劔冑と漂流者と廃棄物が乱世に変える最初の雷鎚であった。

——これは英雄の物語ではない。

漂流し、帰還した道化の物語である。

帰郷編 序編／紡劔騎（前書き）

このようなサイトに投稿する初めての作品となります。

クロスオーバーや性格改変、独自に考察した設定が苦手な方はご注意ください。

帰郷編 序編 / 紡劔騎

——これは英雄の物語ではない。
悪鬼の物語でもない。
ヒトの物語でもない。

創甲道化織鐵

序編

帰郷編 / 紡劔騎

——双輪が描く軌跡のように因果は廻り、運命は廻る。

装甲悪鬼村正の物語と縁もゆかりもない役者と舞台を揃えて、
装甲悪鬼村正と縁とゆかりがある役者を並べて物語は紡がれる。
故にこの物語も次のような開始文句から始まる。
オープニング

この日の舞台は計四幕。
第一幕は、決闘であつた。

軽やかに、そして澄み切った風を切る快音が二つ、上代の闘技場^{コロセウム}
を思わせる建物から響いた。
くりて

音源は兵器の繰手から生まれている。^{グラディエイター}しかし武を振るっているの
は青銅の鎧を纏った無骨な拳闘士でも、蒸気となった氣息を吐く汗
馬でもない。

美しい肢体を晒して空を舞う乙女達だ。
空を舞う美麗な鎧。

この甲冑こそが翼である。

世界へ拡がり、軍事の重要度を偏重させた翼。
ならば妖精が飛ぶような軽やかな、そして澄み切った音を出し飛翔する鎧とは、ある機械に他ならない。

IS である。

インフィニット・ストラトス

IS

天災 篠ノ之束が約十年前に開発したパワードスーツにして、世界情勢を激変させた功罪の産物である。

元は宇宙開発用のマルチフォームスーツであったが、白騎士事件を経て、その従来の兵器を圧倒する性能故に軍事転用された兵器である。

そして世界の蒼穹は近年創作されたSF小説の一場面のように、反重力浮遊、慣性制御といった航空力学を無視した四文字が飛び交うようになった。

ISには空想科学的な兵器がまかり通る。

世に溢れるSF小説が物質を持って引つ繰り返された。

——女性だけに。

そう、女性だけである。

何故かISは男性を拒絶した。

何をしようともISは男性には沈黙し、女性には饒舌を持って応えた。

——女尊男卑。

世界の共通常識がまかり通った。

性急すぎる変化であつた。

女尊男卑思想を父への幻滅から強く持つ、ISを繰る少女は闘っている。

そのISは蒼かつた――

成層ノ蒼穹の名に相応しい蒼さである。
ストラトス

四肢を覆う装甲も蒼く、主力武器の子供のような ビット もまた青を基調としている。

IS機体名を 蒼の雫。
フルー・ティアーズ

青く、蒼く、碧い――様々な青を溶いて混ぜ合わせたかのように蒼い機体である。

セシリア・オルコット。

英国代表候補生にして、クラス代表候補生。

鮮やかな金の髪と天鵝絨のように澄んだ碧い瞳を持つ、眉目秀麗の少女である。

巨大な主力武装 スターライトmk? の引金を引き絞る。

砲口から吐き出されたのは爆音と共に飛翔する砲弾ではなく、直線の光。
ひかり

レーザーだ。

六七口径の砲口から吐き出されるに相応しい極太の直線が、紅い機影に迫る。

「ふっ!!」

桜色の唇から裂帛の氣息が吐き出される。

そして光そのもの、光速そのものの武威を――――回避した。どのような剣士の突きよりも鋭く、戦車砲よりも速い貫通の暴威を、張り巡らされたシールドの寸前の寸前で退いて回避した。

両者の位置を平面で見れば、斜め上に上がる直線の光を斜め下に瞬時に移動して回避したと解る。

極微の消耗の見切りである。

剣道の足捌き——体捌きである。

浮遊する身の上でありながら、心魂まで叩き込んだ剣道の理をIS戦の理と混ぜ合わせ、PICの緩急の操作によりレーザーを斜め後ろに引いて頭上を素通りさせたのである。

「——避けましてッ!？」

青の機影から驚嘆の声が上がる。紅の機影はそれに剣ではなく口舌で応えた。

「——只の足捌きと斜線の見切りだ。撃たれる前に斜線から逃げればいいだけだろう?」

その人を食ったような台詞に、気高い心を持ったセシリアは評価を改めた。

改心である。

信じていた間違いを間違いと認め、新たな正しさを刻みつける。

血縁のコネだけで第四世代という、世界の誰も手にした事のない最新鋭のISを手に入れたと思っていた。

適正Cランクで、Aランクの自分に挑むなど片腹痛いと思っていた。

——とんでもなかった。

鳶が鷹を生んだ家系である。否、鳶が篠ノ之束という地海空宇宙対応合成獣を生んだ家系である。

オカシイ鷹だ。篠ノ乃篁は。

篠ノ之篁。

名字が示す通り、天災の縁者——実妹である。

長い黒髪を馬の尾のように束ねた、剣道小町のような凜とした少女である。

否、彼女は事実剣道小町である。

全国大会優勝者――

伊達や酔狂、生中な努力では辿り着けない栄誉を獲得している。執拗な取り調べから来るストレスをぶつけて強くなった実力であるが、錬磨を刻んだ身魂は相応に強くなっている。

魂の方向性や素材は兎も角として――強い。

空の王者である鷹を比喻に上げてても良いほど、空を飛ぶ彼女は強かった。

そしてその強者が駆る機体は第四世代機 あかつばき 紅椿。

ブルー・ティアーズ に比べて格段に多い装甲――否、装甲だけでなく、他の性能も頭一つ分飛び抜けて高い。

強者に強力な武器。

デュランダルを振るうローランのように、彼女の“強さ”を 紅椿 は引き立てていた。

彼女は強い――

だけど負けてられない――

セシリアはその感想を胸の炎にくべ、さらに心を奮い立たせる。

「素晴らしいですわシノ――いいえ箒さん。さあ踊りましょう!!
IS 同士が奏でる円舞曲 ワルツ を!!」

それは相対する者を心底好敵手として認知した誘いだった。
その言葉に箒は、

――ほんの少しの両親との会合。

――ほんの少しの実姉との歩み寄り。

——ほんの少しの恋慕との別離。

「生憎踊りなんて神楽舞しか知らないが、踊ってやろう!!」
威勢を持って剣嵐ブレイド・アーツ舞踏への要求に応じた。

入学祝いに第四世代IS 紅椿 を得て、家族の愛と会合を得て、
無茶苦茶な姉への頭痛を増やして、幼馴染みを失ってほんの少しだけ篠ノ之箒は強くなった——

アリーナに付属した整備ヒット壕とも呼ばれる部屋に、モニターを注視する二つの影がある。

人影は山田真耶と織斑千冬だ。
「すごいですねえ。お二人とも動くたびに記録を更新していきますよ」

「ああ、だが二人とも相手しか見えていない。自分が見えていないんだ。

——山田君、念の為救護班の準備を。おそらく決着がついた瞬間に二人共気絶……とまでは言わんが立ち上がれなくなるぞ」

真耶は喝采を上げ、千冬は辛辣な言葉と気遣いの指示を投げる。

ついでに千冬は、にやつく真耶にヘッドロックを振舞った。

小さな戦乙女達の剣嵐ブレイド・アーツ舞踏は、さらに加速と上昇を繰り返している。

篠ノ之……

千冬は少しだけ強くなった弟の幼馴染であり、自分の幼馴染と言ってもいい少女を見つめる。

意味は憧憬か、羨望か、悲哀か、憂愁か。

織斑千冬も分からない。

踊る。
躍る。
舞う。
飛ぶ。
撃つ。
討つ。

剣嵐舞踏の円舞曲ワルツを躍る。

両者に勝敗の概念は忘却した。

只相手の上を征く事のみに身魂を尽くす。

戦う――

只相手よりも先に撃つ事に一心する。

闘う――

只相手よりも強く斬る事に専心する。

たたかう――

只、己が最強だと証明する為に――

紅と蒼がぶつかる。

空に灰の星が――

生命の安全がほぼ確実に保証された茶番のような決闘はこれにて
続きましては第二幕。

これは鎧袖一触の鉄人形が、疲労困憊の紅鷹と蒼鷺を討ち取る蹂
躪劇である。

鉄の銅鑼を叩き割るような轟音が両者の間で鳴った。

「——なっ!?!」

「——きゃあ!?!」

篠ノ之箒とセシリア・オルコットは発生した轟音と衝撃によって弾き飛ばされる。

PICの制御によって地に叩き付けられるような無様は晒さなかったが、緊張の糸は切れた。

張り詰めた部位が崩れる。研ぎ澄ました戦意が折れる。

積み上げた心意の熱が揺れ瓦解し、極峰へ至らんとしていた武が転げ落ちる。

——二人の膝が花を手折るように折れ、今頃視界に霞がかかる。

武は続けられなくなった。

彼女等は武人から武器を持っただけの少女となった。

ISもエネルギーが雀の涙程しか残っていない、罅入った鎧と同義と化した。

「何事だ!?!」

責任者である織斑千冬の怒号が整備壕に広がる。

「しょ、正体不明のISがアリーナに進入。ええとそれから……ええ!?!?!」

吃りながら小柄な一年一組副担任、山田真耶は報告、そして驚嘆。

「どうした」

「整備壕の隔壁が作動しています。レベル4!

このままじゃ篠ノ之さんもオルコットさんも閉じこめられて」「何だとッ!」

アリーナの緊急時に作動するシャッターや隔壁が下り、乙女が舞う可憐な闘技場を哀れな子羊が獅子に喰われる檻へと変貌させた。

怜悧な美貌に汗が滲む。

噴煙と放射熱に包まれた影。

それは紅椿に似て、しかし無機質な全身装甲のISであつた。フル・スキン

二メートル近い深灰色の巨体。

極端な猪首の頭には剥き出しの視覚装置。センサー・レンズ

極端に長い両腕には四つのビーム砲門が付いた重武装である。

ゴーレム？。

シールド突破の振動に震えていた装甲が止まる。

「――！」
「――！」

少女等は武威を感じなかった。

只、暴力的なまでの圧迫感を感じた。

それは意思のない人形に対して、人間が気味悪さを感じる――気のせいと呼ばれる感覚である。

そしてそれは自衛本能の無意識的発露であり、意思のない毒物や危険物に対して働く機能である。

危険を直感する。

襲撃者は、劇物のような暴威を解放した。

三者は虎である。

しかし健康な虎と創痕の虎二匹では勝負にすら成らなかった。

第二幕は蹂躪である。

蹂躪はあっさりと過ぎ去っていく。

そして始まる第三幕。

それはある種の奇譚であり、同時に新たな物語の始まりを予感させる鐘の音である。

第三幕は、現出である。漂流である。帰還である。

結論を言えば、空間に穴が開いた――

誰も彼もがそれを見た。

青息吐息の箒もセシリアもそれを見た。

管制塔の千冬も真耶もそれを見た。

逃げ遅れた見物人もそれを見た。

襲撃者もそれを見た。

何故か作動しない停止装置に業を煮やしていた篠ノ之束も電子の眼越しにそれを見た。

度肝を抜かれた。

――黒だ。

渦を巻く黒が天にあった。

蒼穹を遮ることなく、しかし金城鉄壁の天井シールドが張り巡らされた天空。

そのシールドの手前に出現した黒渦。

大気を巻き込み、砂塵を蠢かせ、はつきりとした形で大人十数人が手を繋いだよりも大きい黒円が空中に描かれている。

ブラックホール――

宇宙物理学に詳しい誰かはそれを想起した。

しかしそれは絶大な重力で引辰の作用を働かせることはなかった。不可思議。

不条理。

道理に合っていない。

突然こんなものが顕れるなんて間違っている！
しかし物事は思いに目もくれず進む。

やがて黒の中に白が顕れた。

白い点である。

白い点は徐々に大きく輪郭を変え、風斬る音を立ててアリーナの中空を貫く。

白の軌跡は地に砲弾のように着弾。

銅鑼を叩き割るかのような轟音が、本日二度目の轟音が、二人の少女を間近で叩きのめした。

「ぬわあ——！！？」

「きゃっ——！！？」

悲鳴を上げ吹き抜ける烈風と共に転がる。

互いの体をしかと抱きしめ合い、相手を守るように転がる。

その様は転落する虎のようであり、もつれ合う蛇のように体が交ざり合う。

そして爆心地より七メートル程離れた地点で二人は停止した。

黒渦は数秒前と同じように、最初から無かったかのように消えていた。

上には相変わらず忌々しい隔壁がある。

十数秒前からあった電波障害も急速に復旧した。

「へえ、はあ、ふうん」

快活な女性の声が名無しのラボに流れる。

視線は超スローモーションで流れる白の彗星の映像を見つめていた。

天災級の頭脳が記憶を再生させる。

再生再生再生——該当記憶再生。

再生情報を照合開始。修正修正——完了。九十九・七九六九

%一致——

「——あは、」

……ちーちゃん、箒ちゃんあめでとつ」

——…………お帰りなさい。

最後の眩きは音に成らず消えた。

クレター
衝突孔である。

爆撃された地面のように、アリーナの地面には浅い衝突孔と轍が出来た。

ビームやらレーザーやらで地面が盛大に掘り返されていた影響だろう、真深く土煙を上げている。息するのも辛い衝突孔から、土埃の紗幕の中を何かが進み出でる。

靴音を静かに立て、着地の現実など微塵も感じさせない悠然とした足取りで進む。

襲撃者は砲門を向けた。

長すぎる右腕の四連ビーム砲門を輪郭が不鮮明な影に向ける。

衝撃に叩きのめされた箒もセシリアは反応を寄越さなかった。

管制塔の教諭陣も対応に追われる三年生の生徒達も思考が固まっていた。

人々が沈黙する中、無慈悲なビームが一条走る——

「——」

雷の如き速度で疾走する熱線は、同じく神鳴りが如き大気の斬撃音に切り裂かれた。

物質ではなく熱エネルギーの塊であるビームは、物質である刃の前に霧散した。

——烈風が砂塵を払う。影が輪郭を得て、紡錘形の形を取る。

取り払われた砂の紗幕から頭れ、最初に目を引くのは幅三・五インチ、刀身三フィートの正統的な西洋剣だ。十字軍時代に良く好まれた十字架型の十字剣である。クルセイダー・ソード

柄頭には赤い石細工が鈍く輝^{ひかり}を灯していた。

一フィートの柄を握るのは薄手の革手袋を履いた右手。白の紗幕からそれが伸びている。

白の紗幕はよく見てみると長い繊維が集まって出来ていた。

否、無機物の繊維ではない。

髪だ。

現れたのは白色の膨大な量の髪の毛である。

獅子の鬣のように前頭部から後頭部にかけて盛り上がり、揉み上げや前髪、後髪は長く足首まで垂れている。

蓬髪にしては整い、整髪にしては乱れがある。

また、遠目からは縁から飾り帯が長く伸びた編笠のように見える。髪が本体のようなヒトである。

そして当然のごとく顔貌はほばわからない。しかし傘からはみ出る肩は広く大きく、髪長姫が如き髪の主が大柄な男だということを誇示していた。

大柄な男である。

目分量で髪は二メートル強はある。盛り上がりの分と靴の高さを差し引いて男の身長は、一九〇センチメートルに迫る長身である事が知れる。

その長身に覆い被さるように背負われているのは唐草模様の蒼古とした風呂敷包みだ。人間二人くらい入っているのではないかと思えるほど大きい。

……黒いワームホールから出現し、墜落死必死の高度から無傷で着地し、十字剣でビームを切り払い、毛羽毛現の如く膨大な白の毛量を湛えた長身の、おそらくは男と推測される、風呂敷を背負ったヒト。

情報だけを与えられた第三者はこう言うだろう。

——異常者、^{へんじん}と。

そのように客観的に異常者と客観される男であるが、アリーナの当事者、箒やセシリアや千冬や真耶や逃げ遅れた生徒面々には別のモノが見えていた。

それは彼女等の主観である。

彼女等は白とは正反対のモノが観て、感じ取れていた。

黒々とした暗雲を孕んだ夜の鎮守の森——

砂粒一粒も余計な色も光も苔も蟲もない深淵の豎穴——

豎穴の底にある横穴の、封じる蓋として機能する岩戸——

決して開けてはならない扉を白髪に見立て、その奥に絶対の黒を印象づけられた。

男は黒々としていた。

幽玄の黒の雰囲気を得たまま、高山の空気を肌身で感じるように立っていた。

鎮静制御。

丹田を軸に血の時計を回す。減速し散逸し乱編する。

熱量を偏位。必要箇所に必要な量を。

築かれている機関に熱量が巡る。巡る熱量が手綱として機能する。

把握掌握流動駆動修正修正操作制御鎮圧鎮静冷却固定——成功。

暴走寸前の状態を制御し、鎮静することに成功した。しかし機関と熱量の消耗は激しい。時空間跳躍は最低一週間は行えないと判断する。また、戦闘行動は短時間であれば問題無し。

状況を確認。

自堂は攻撃を受けた。攻撃内容は多大な熱量と指向性を持った洩の束——ビームである。

幸いにも攻撃を即座に予見して防御に成功した。

しかし土地条件か時期条件か、自堂が攻撃され得る状況下に跳躍移動してしまったようだ。

自堂が不審人物として攻撃を受けたのなら無抵抗姿勢にて、拘束を受け入れる判断が望ましい。

此処の所在が戦場であり、自堂への攻撃が流れ弾であつたのなら自己の隠蔽及び逃亡行動が妥当と判断できる。

判断材料が不足している。情報を蒐集する必要有り。

――
――
――

この時間軸が、自堂が存在した後の時間軸かは、現在のところ不明。

同様に同じ理由で自堂が居なくなった世界軸か、現在のところ不明。

同時時間帯で跳躍したが、数年、十数年の誤差は出ているだろう。世界確認は保留とする。

場所確認を優先する。

競技用剣闘の競技場のよう
に楕円上に観客席が配置され、退

避整備壕らしき入口がある此処はアリーナと論断できる。

闘技場を思わせる土の地面に、残された無実体弾丸等による弾痕から訓練戦か実戦かは不明だが、戦闘状況に置かれている。

土埃は大分晴れている。身嗜みを整えるのは後にして、ビームの斜線方向へ顔を向ける。

……人形である。命の気配はなく、ヒトの熱源も探知できない。
中には人はおらず、機構仕掛けで動く自動人形の類である。

主武装は長すぎる両腕に装着された砲である。八門。多いが腕だけでは切り落とされた場合、丸腰になってしまう。その推論から製作者は単独で思うがままに作ったと推測できる。

注目すべき点は武器ではなく足。

……浮いている（……）。

回転翼を使用せず空中静止している。足裏の燐光発する機関が浮遊装置乃至推進装置、若しくは両方か。高度な文明の兵器である。

視線を左に向ける。

口を半開きにした惚けた表情をした少女達だ。

年齢はどちらも十の半ば程か。東亜系統の黒髪の少女と北欧系統の金髪の少女だ。

馬尾結の少女は武練に優れている。得物は刀だろう。信武両道の巫女と印象を得る。

毛先が竜巻、縦ロールの少女もまた武練に優れている。こちらは銃砲だ。狩りを嗜みとする英国貴人と感じる。

只、黒髪の少女については郷愁も感じている。知り合いだっただろうか……。

心情を保留にし、絡み合うように座り込んでいる少女等の様態を観察する。少女等が女色で常時の最中だったら平手を頂戴しても仕方がない視線だが、所在から判断するにその可能性は低そうである。

——四肢しか覆っていない鎧である。急所を全く守っていない。また、脚部の甲は長く、爪先まで足が届いていない事が伺える。

歩けない。ならば此れは歩くものではないのだろう。機械人形と

同じ科学で移動するのだらう。

——……うむ？ これと同様のものを嘗て見たことがあっただろうか？

疑問を保留し、容態を診る。……衰弱である。酷い疲労状態にあるようだ。立ち上がる力すら残されていない。相手にとっては鴨打どころか、止まった的打ちである。

深灰色の機械人形と戦っていたのか、それとも別件で消耗したのかどちらかであらう。衣服と体内に保有する病原菌に気を付けて、医務室か病院機関に連絡を取らう。

さて、まず何から手をつけるべきか。

……………。

機械人形を停止させるべきだらう。あれは彼女等も狙っている。遠隔操作か自動操縦か、ビームの威力は大したものだ。装甲以外の法理で防御出来るとしても限界はあるだらう。そして限度を超えたから、立つ力も失っているのかもしれない。

方法は二つ。

言葉か兇器か——まがきもの観察を続けて判断しよう。

逃げ遅れた生徒達は遠目から見て肩を抱く。

間近で見た筈とセシリアは息を呑みほす。

真耶は怯えの感情を深く得た。

しかし、一人だけ違った反応を寄越す者がいる。

「……………う」

織斑千冬である。

胸乳を押さえる。風によって髪に隠れた顔貌を垣間見たときから心臓が跳ね上がったいた。

男の行動そのものではなく、男の存在そのものが千冬の胸をざわめかせている。

解らない。

理解^{わか}らない。

でも胸が締め付けられる。

そつと口ケツトを握りしめる。

中には破顔する詰め襟の少年の姿があった。

誘拐犯の車が事故に遭い、死体も発見されない死に方をした弟の
写真だった。

織斑千冬という女の心情を余所に白い男は歩を進めた。

三メートル程上空を浮く深灰色のISに向かつて。

飢えた獅子に等しい存在へ、悠然と羊（男）は歩を進めたのだ。

男と襲撃者と少女等は二等辺三角形を描く点に位置している。

鋭角を描く頂点にいるのが襲撃者。同角の二点が男と少女等である。

「――？ ……！ ちょっとおまえ、何をやっているんだ！？」

「――何をしておりますの！？」

衝撃から復帰した言語発音機能が最初に行ったのは、男への注意
だった。

当たり前である。

常人の道徳である。

生身の人間がISへ挑むなど正気の沙汰を飛び越して狂気の中へ
浸る行為である。

それを止める事に何の不条理も存在しない。

ヒトとして生きる上で当たり前。

彼女等は常識人である。

しかしそれが意味を持つのは、相手が常識の枠にあるヒトである

場合のみ。

——やはりあれは彼女等にとって敵であった。そして近づく自堂に注意を勧告したということは、危険値が等比級数的に増大している。

そのように男は思考する。

《篠ノ之、オルコット、その男を止める！——貴方もだ！襲撃者から速く離れて下さい！！》

千冬はモニター越しに命を怒鳴り、男に避難を勧告した。男の素性は知れないが、敷地内でISによる無関係者の死者が出ては大問題以前の話である。

否、それよりも千冬は直感していた。

崩壊の予感だった。

この男の存在が自分という人間を完膚無きにまで揺り動かす。壊すか癒すか——それはどちらにでも取れる。

焦燥。そして恐怖。

それに千冬は支配されていた。

男もまた、ある感情に支配されていた。

あゝ
噫——

この声は、貴方が——

貌は凝ったまま、心は涙を流す——

啾々——

セシリアも筈もある感情に支配されていた。

人を助けると言う人として当たり前前の感情である。

セシリアは貴族の誇りを胸に、

箒は歩み寄りと頭痛の種を増やした姉に報いる為に、人を助けようと動き出す。

酷使が過ぎてストライキを訴えている筋肉に力を入れ、無辜の――非常識的な行動を取る男性を捕まえようと動き出す。

そしてそんな男を長い右腕に備わった砲門を伸ばして襲撃者は射抜こうとする。

「――双方共、お待ち下さい。

漂流者が如き者が言う資格は御座いませんが、言わせて頂きます。――どちらも矛を納めたし。斯様な仕儀になる前に良くお考えください」

噎れた、しかし良く耳に通る古臭い口調がアリーナに流れた。

箒もセシリアもその声が何処から来たのか分からなかった。

長髪の白髪の男からだとは思えなかった。

髪の傘から伸びる黒のズボンの足は何処まで続くのか分からないほど長く、同じように広い袖から除く肌を隠した腕も長く快活に動いている。

腰も真っ直ぐで足取りも肩筋も確か。

黒々としているが老人のように枯れてはいない。

白髪以外老人以外に見えない。

それが疑問の原因だった。

噎れた老爺のような声を男が出したとは思えなかったのだ。しかし事実、その噎れ声は男のものである。

驚きを置き去りに、男は朗々と言葉を並べ立てる。

「……放送にて指示する御方へ具申します。

この少女等には最早、争う力も逃げる力も残されていないよう見

受けられます。

故にこの娘達が立ち上がる事は無意味であると判断できます。

——犬死に、と呼ばれる行いに御座います」

正論である。

少女等には闘う力は残されていない。

此処で動いても少女等は更に酷い状態になるかも知れない。

《そんな正論を話しているのではない！ 貴方の身の安全を確保しなければならぬのだ！ ——だから貴方は二人と協力して逃げ回って下さい！！》

正論である。

教師としてもIS操縦士指導者として常識人としても常識的な思考である。

男は女より弱い。

男はISを使えず、ISに抗う事は出来ない。
だからこの白髪の男は逃げなければならない。

人々の正論による議論を他所に、無人機はビームを放つ。

それは空間を走り顔の横の空間を貫き、地面に土飛沫と水蒸気を生み出すだけに終わった。

外れた。束謹製の無人機（IS）が外した。

「我が身の御配慮に、放送する貴方とその少女達に感謝を。

——それに自堂^{じへい}への心配は御無用に御座います」

眉一つ動かさずビームを見送った男は、ISに狙われた男はそう言い捨てた。

男について何も知らぬものが聞けば凶気にしか聞こえなかった。
凶気である。……兇器^{けうき}を持っている。

そして無人機が攻性状態を止めぬ事を判断するやいなや、武装放

棄の言葉を慎み、荷を少女等に放り投げ、前方を向けて右の手刀を放った。

まがきもの
兇器を振るう者は、争いに飲まれるが運^{サダメ}。

自堂はそれを恥じ入ず、受け入れる。

善悪全てが混ざった仕儀を飲み干す。

な
銘を呼ぶ。

パスワードを入力する。

創甲の仕儀を実行する。

「
おりがね
織鐵
」

——埒外の、常識の外の、条理の沙汰の跳躍の事象が生じた。

……
ありえない。

篠ノ之箒は埒外の事象を見ている。

膨大な量の白髪から体積を減じることなく膨大な量の白絲が溢れ出る。

絲。

弦。

紐。

纖維。

絲の洪水が髪から生じ、布地を叩くような音を立てて地面に広が

っていく。

やはりあの男、化生か何かだったのだろうか。
蜘蛛の化粧。

男の女郎蜘蛛の類だったのか。

私は今、狐狸に化かされているのか――

「此は α （アルファ）にして Ω （オメガ）である」

右手を心臓に当て、装甲ノ構造^{ソウコウノカマエ}を取り、誓約の口上を述べる。

……ありえませんわ。

セシリア・オルコットは常識の外の事象を見ている。

絲の洪水が宙を舞い、形を織り上げている。

見えぬ織機が糸を織り上げ布を作り、布を合わせて分厚い布地を造っていく。

形状は六角形、長方形、紡錘形、紐状と様々だ。

それらは冷間線引き鋼線や単結晶の繊維が集合した甲鉄である。

籠手の。

脚甲の。

肩甲の。

胴丸の。

面頬の。

兜の。

角の。

筒の。

――兇器の甲鉄^{ヤウテツ}である。

「其は色^{それしき}にして空^{くう}である」

心臓を掴み出さんばかりに力を込め、隠された顔で武を振るうに
相応しい禍き笑形を作る。

……ありえんだろうこれは。

織斑千冬は条理の沙汰の跳躍した事象を見ている。

それはISではない。

男である以前に、世界で四七二個しかないコアが作るISにはこのような展開方式は無い。

絲を織り上げ布を作り、布を合わせて装甲と成すなど、何処の政府も会社も採用しない。

無駄。

不条理。

しかし実際に行なって、一つの兵器を生み出そうとしている。
舞う甲鉄の花弁。

綺羅綺羅と表面は輝き、銀細工めいた輝を纏っている。

中心には、白の紡錘形の影を作る黒の男。

そして最後の口上を詠み上げる――

「ツルギの輪廻^{なぐれ}、此処に在り！」

打ち出す右の拳（古武士）。

集まる甲^{はがね}の花弁。

一領の劔冑。

一人の人間。

合一し、顕れるは白色^{びやくしき}の鎧士^{かいし}。

「当方織鐵。一身上の都合により貴方を停止させて頂く」

深灰色の機体へ向かって合当理^{がったり}に火を入れた騎体（織鐵）は、猛烈な邁進を開始した。

第三幕は終了。

続く第四幕。

インフィニットツルギラトス

ISと劔胄。

この世界の最高兵器と別の世界の最高兵器が激突する。

——白の合当理が赫突迸る炎を上げる。

百の餓狼の唸りにも似た排気音^{エグゾーストノートのほ}が上昇る。

白の星は竜蛇めいて狡猾に。

灰の星は機械めいて単調に。

咆哮がアリーナを叩く。

無機質な運動音がアリーナを渡る。

白色の武人は合理主義の兇法にて剛剣を操り、

灰色のISは自動操縦の合理にてビームを放つ。

戦場の熱を感じ取れない寒々とした戦闘。

怒りも、慚愧も、無念も、悲嘆も、

喜びも、慰撫も、許容も、愉悦もない。

第四幕——

この日最後の一幕は、最初に習って決闘か。

否。

そうでは、ない。

これは闘争ではない。

比べ合いでもなく、競い合いでもない。

眼の前にあるものを壊して安全を取る、矛を使った只の危険予防。

白に敵意と殺意はなく。

灰に害意と戦意はない。

そして祈り——

神でも仏でも霊でもなく、何かに祈る。
幾十、幾百の年月の果てに善行として判断される時を。

やがて白色は灰色と共に地へ落ちる。

少女等の身の安全を考え、肘関節を取ったISごと地へ落ちる。
推力の勢いと重力の加護そのままに猪頭の頭を地へ叩きつける。
土で不揃いの目と言う特異な顔型を取らせ、白色は大剣を抜き放
つ。

広く、分厚く、大雑把——正しく鉄塊とも言うべき大剣を、樋が
走った刃腹を腋に通して地に突き刺し、構えを取る。

大凡、何処の流派にも見たことのない構えであった。

剣を埋没させる型など甲冑刀法にも素肌剣術にも存在しない。

横線が眼と口元に走っただけの素っ気ない無貌面の下、薄い唇が、
一節の詩を唄った。

「ホロウコースト輻暴拔刀——アカラ“嚇”」

それは正しく大地の嚇怒。いかり

大地を鞘に、

轟音と称するの生ぬるい爆音を加速力に、

ゴルフのショットのように刀刃は下から上へ白三日月の弧を描き、
ISの脇腹をかち上げる。

深灰色のISはその機体を半分以下に圧縮され鋭い三角形のよう
な形状に変わり、水蒸気爆発と超高温の摩擦熱を纏って天井シール
ドを突き抜けて、遙か天空で爆裂した。

敵機の爆裂から逃れた少女等は、膨大な土煙の飛沫を浴びて盛大
に咳き込んでいた。

この日の舞台の演目は、決闘、蹂躪、帰還——そして予防。

この日の舞台はこれにて終了。

続きましては幕外^{アンコール}の話。

再開の幕、である。

「おま……貴方は一体何者なんですか？ それにどうやってISを？」

箒は途中で丁寧語に変え、疑問をぶつける。

「右に同じですわ。あんなISどの会社も政府も開発しておりませんわ！ いえ、それ以前に男に使用はできないはずです。……それと感謝も」

セシリアも詰問を飛ばす。命を助けてくれた感謝と男性蔑視が混同している態度だった。

両者とも襲撃者が消え去り、男に清潔な手拭い越しに手を取られて立ち上がった数秒で元気を取り戻していた。

溜まりに溜まった乳酸も切れた筋繊維も疲労感もどこかに消し飛んでいた。

自分等より遙かに大きく、黒々とした男に対して興奮が後押ししているだろうが物怖じせず姦しく問いを飛ばす。

渡された手ぬぐいで顔を拭くのも忘れている。

男は黙って声を浴びている。

少女等には見えないが顔色はやや悪い。熱量を消耗し過ぎた所為であろう。しかし、口に出すことなく、

「至極当然の疑問と存じます。しかし今は御遠慮頂ければ幸いです。自堂が疑問の解を差し上げる相手は貴方方ではなく——そちらの方、責任者と状況判断できる御方です」

と、疲れを見させず、髪に埋もれた口が至極丁寧に真つ当な論理

を述べ立てる。

視線は漸く檻からいから常へと戻ったアリーナに、大急ぎで駆けつけた織斑千冬に向けられている。暫し遅れて山田真耶しほも駆けつける。奥には生徒の姿がちらほらと見えている。

確かに状況説明すべきは生徒よりも教諭である。

至極常識的な判断であつたが、千冬は常識に従わなかった。

「——顔を、顔を見せてくれ！」

嗚咽にも似た懇願だつた。

願っていた。

織斑千冬は自身の全存在を賭けて希っていた。

そうであつてほしい、と。

違うこんなのは違う、と。

相反し、矛盾する希求。

「織斑先生……？」

真耶は視線を同僚に向ける。訝しげに、そして気遣うように。

「織斑先生……？」

「先生……？」

箒もセシリアもまた厳格な先生の態度に眉を顰め、そして気遣う態度を諂りかねていた。

「お願いだ……。顔を、顔をはつきりと私に見せてくれ。」

織斑一夏の姉である織斑千冬に見せてくれ……」

声の最後は萎む花火のように消えていった。

男は幾秒かの黙考の末、——右手を前髪に伸ばす。

千冬はその所作をじっと見つめる。

「諒解。自堂は貴方の希望通り行動を示します」

右手が動く。白の紗幕を取り払う。

右手が前髪を後ろに撫で付ける――

貴方は何と言うだろうか。

貴様は誰だ、と誰何の激を飛ばすのであろうか。

それとも自堂の名を呼ぶのであろうか。

嘗て貴方が呼んだ通りに……。

全ての可能性を受け入れましょう。

そこに奈落があつた。

誰もが感じた。

人の顔ではなく、悠久の底を見せる無明の深淵があると感じた。

典型的な東亜系黄色人種の肌である。

幾つか擦過傷や創傷の痕らしき痕跡が頬や額に見て取れた。

年頃は若く、二十歳前後と言つていい肌艶である。

美形である。

十分に二枚目と言つても良い造形だつた。

髭はなく、力強い輪郭の顎が細い頬に繋がっている。

鼻筋は整い、固く結ばれた薄い唇が実直な印象を与える。

眉目の毛は髪と同じく白で、短く揃えられている。

人間の顔である。

厳しい張り詰めた凶相でもない。

しかし奈落である。

瞳だ。

黒の眸。

そこに闇^{ひかり}があつた。

陰気や邪気などの胸が悪くなるような光はない。

只、宇宙のように、夜のように深淵^{ふか}過ぎる黒があつた。

見つめると自分が広大無辺の闇のただ中に取り残されているような気がした。

見つめると自分が無音無明の闇の中を落ち続けているような感覚に縛られた。

宇宙の闇全てを一点に凝縮すればこのような闇の結晶ができるかもしれない。

底が無い（・・・・）。○

こんな目をする人間がいて良いのか。

顔を見、すぐに逸らしたセシリア、真耶はそう思った。

髪は窓であつた。

黒の底を少しばかり覗ける窓。

ファイヤーウォール
入力される情報を抑える防火壁であつた。

まともに見てはいけない。

見れば宇宙的恐怖が襲う。

箒は数秒の記憶を再生する作業を持って、正体に辿り付いた。千冬は見た瞬間に正体へ辿り着き——激しく嘔吐した。

—— あああああああああああああああああああ
アアアアアアアアア——！！！！！！

何故！！

何故だ！！

何故お前がそんな顔をしているんだ!!!

お前のそれは眼じゃない。

人の器官ではない。

穴だ！

闇だけがある、底無しの穴だ！

弟よ！ お前の魂はどこにある！

弟よ！ お前の心はどこにある！

弟よ！ お前はどこにいる（・・・・・・）！

返してくれ。

還してくれえ。

弟を返してくれ！

チフスに犯されたかのような激しい吐瀉だった。

珈琲によって黒く染まった反吐が地面に落ちる。

厳格な教諭の突然の変貌に皆沈黙した。

突っ伏し激しく咳き込んでいる千冬の背に手を当てる者がいる。

白い男だ。

もう片方の手を肩に当て、顔を上げさせる。

夜色の瞳が閉じられ、目礼する。

反吐に汚れた口元を手拭いで拭き取る。

動作一つ一つどれをとっても慈しみ、そして身内への親愛に満ちていた。

箒、セシリア、真耶の三人はその情を感じていた。漸く男がちゃんとした人間に見えた。

拭う手拭いを押しのけ、千冬は鍛えられた胸板へ抱きついた。

男もまた——それに応えた。

抱擁。

「あつ……」

「あらっ」

「えっ？」

三者三様の驚愕。遠巻きに見ていた生徒も黄色い歓声を上げる。

それは当たり前前の行動であり、衝動である。

再会には抱擁が付き物だ。

髪にくるまれながら千冬は青息吐息で言葉を紡ぐ。

——、一夏。

織斑一夏は、はい、とだけ応え姉を強く抱きしめた。

—— 自堂を失った貴方の下へ、自堂は只今を持って漂流し帰還致しました。

この日の幕と幕外の物語はこれにて終了。

続きましては番外編。

ある国、ある地、ある時の物語である。

「もしもし聞こえてる？ —— おじいちゃん」

「ああ、聞こえてる。そっちはどうだ」

金髪の少女は水晶に向かって会話していた。

「見た目通りのおじいさん二人だね。ただ……」

「ただ？」

「なんだか喧嘩の真つ最中みたい。ツルギ（・・・）を装甲しつちやったよ」

「止める。あと大師匠と呼べと云っているだろう」

「はい」

通信は終了した。

書籍や簡易端末が山と積まれた部屋で白いスーツの若い男は独りごちる。

「速く何とかしないと。でないと——」

視線は笹竹を、星詠みの記録を記した紙を、式に撮らせた写真を見ている。

「ほんとにこの世が滅んじまうぞ」

写真には襷褌切れのローブと漆黒の虚。

また、ある処では。

「東方も西方もISの扱いに天手古舞い」

人影は薄ら笑いをしながら独り呟く。

「おまけにあんな者までこっちに復活てからにはさあ」

窓の前に立つ。眼前には白磁のセミラミスがあった。

「おまけにあの道化も帰還たからにやあ、この世界も黙示録的な大打撃を受けるのだわさにや——」

けげばばしい化粧の顔が喜悦に歪んだ。

また、ある島では。

「まだ劔冑は生きている。一応手当てしてやれ。運が良ければ生き延びるだろう」

家紋の下に甲高い声がする。

「コイツも飛ばされてきたんだろう。儂等と同じようになあ。ふふん」

同じ立場の相棒に身を預けた男は、魔王のように嗤う。

「——面白きものよなあ、この浮き世は」

——これは英雄の物語ではない。
漂流し、帰還した道化の物語である。

TO BE CONTINUED .

帰郷編 序編／紡劔騎（後書き）

拙作を読んでいただき有難うございます。

彼の過去については追追書いていくつもりです。

主要登場人物の性格などの変化については、織斑一夏がおらず、周りとの付き合いで変化していったものとしております。

帰郷編はインフィニット・ストラトスと装甲悪鬼村正のクロスオーバーです。

ドリフターズとのクロスはまだ先です。

また、ドリフターズと装甲悪鬼村正のクロスでもあります。

追記：R15の限界ってどのあたりなのでしょう？ バンパイヤー戦争くらい？

第一編／生活騎・上（前書き）

ほぼ一週間後に投稿。第二話で御座います。

第一編／生活騎・上

ある時、ある場所で――

この言葉は意味を持たない。

時もなければ、場も無い。

此処と呼べるか、彼処と呼べるのか――

人間が開発した時間という概念は意味も無く、価値もない。

場所という概念もまた、位相が不明である。

とりあえず此処と仮定とする。

仮定された此処の外観を明記する。

白い継ぎ目のない石かコンクリートか、素材は不明な廊下である。
その廊下は延々と続いていた。

――そう、延々（・・・）と、である。

遙か先が見えない。前後と言ってもいいのか分からないが、果てがない。

無限。

或いは無間。

限りなし。

間無し。
はつちか

無限続く廊下には多種多様の扉が納まっている。

扉は一つとして同じ物が無いのではないかと思える程種類が多く、
幾万幾億か数え切れない程である。

非常識的である。

白の廊下は延々と継ぎ目はなく、多々の扉は一つとして同じものはなく壁を埋め尽くす。

その非常識空間に男は在った（・・・・・・）。

男。

少なくともそう見識できる。

髪色肌色は西洋のもの。ベストにワイシャツ、ネクタイに袖力バ
ーの四つの装束は事務員のようにも見える。

椅子に座り、机に向かい新聞を読みながら喫煙する様は休憩中の
それである。

そして机の男から向かって左側には、日本語（！）で指示書きが
記された整理券発行装置が置いてある。

廊下を遮るように置かれた机の前には『昼休み中です。しばらく
お待ちください』のプラカードが下がっている。

新聞を読む事務員。紫煙の香りがくつろいだ昼休みの空気を描く。

非常識の中の常識――

短絡的に考えればそう思える。

しかし非常識の中に在る男がそうではない事は、目を見れば皆目
分かる。

無。

何も読み取れない。

凍^{こも}って透徹した水晶体には、光も闇もない。

廊下と同じく“無”の何かがあるだけだ。

その無の双眸が動く。新聞から目を離し、眼前を注目する。

変化は唐突。

妖言は突然。

「紫^{むらさ}」

廊下の果てから一点、黒墨^{こくぼく}の染みが現れた。

黒は瞬く間に広がり、男の眼前で急停止。全てが黒白に染まった

ワイヤーフレーム状の廊下により一層黒い影が顕現する。

影の形状は少女である。^{かたち}

左右非対称形の手袋と靴とワンピース。

黒の服飾を纏い、星印のネクタイと首の下げ札が闇の中に栄えている。

荘厳な動作で長袖の右腕を掲げ、女王のように不遜に語る。

「まだ帰還者^{イレギュラー}の動向を調べていたの紫？

頑張り屋さんね。そして無駄なあがきよ紫。

た^{ドリフターズ}とえ彼が漂流者の側についてたとしても、

た^{エンス}とえ彼が廃棄物に敵対したとしても、

——全ては無駄なのよ。全て私の勝ちなのよ」

可憐な唇は^{まが}兇き笑形を得る。

紫 ——それが男の名か。

紫は視線を新聞に戻す。視線は文字と絵を辿る。

『IS学園に帰還者現る！?』『織斑一夏』『劔冑“織鉄”』『ゴ
ーレム?撃破』『篠ノ之博士邂逅画策』『漂流者?』『廃棄物?』等
の見出しと文字が踊り、黒い白髪^{エンス}の男の顔写真が添付されている。

「改めよ EASY。彼はイレギュラーなどではない。

認識せよEASY。彼は元の鞘に納まった。——これからだ(・
・・・)」

無表情に少女EASYに言い放つ。

苦々しげに、憎々しげに黒の少女の貌が歪み、堪えを食い止める
ように唇は引き結ばれる。

「哀れな男よあなたは、紫。もうこれから(・・・・)は無いのよ

——」

顕れたのと同じく唐突に、EASYは消え去った。

ワイヤーフレーム状の廊下は静かな悠久の廊下へと戻った。

紫煙の香りに混じる仄かな少女の残り香が紫の鼻腔を擦った。

創甲道化織鐵

帰郷編

第一編／生活騎・上

テレビがある。

受信する放送電波はニュースだ。

『……………にIS学園での学校行事の最中に、学園に属さないISによる事件が発生しました』

朗々とキャスターは、国内法が適用されないIS学園での事件を報道している。技術情報開示の規定はあるが、秘匿されるべき情報や隠さなければならぬ情報は多々ある。

しかし教育機関であり、世界中から集まった優秀な子女達を多く有する学園での事件である。保護者や関係者への説明、またマスコミ等への情報提供も行わなければ機関として立ちいかない。

『加害者であるISは、専用機持ちの生徒の手によって応戦を受けました。また、加害者のISが用途は不明ですが、連れてきた（・・・）と疑わしき男性も保護されました』

事実ではない。

しかし嘘ではない。

加害者側のISは、専用機持ちの手によって少々のダメージは負った。

男性が現出した理由と原理は不明であり、不明だからこそ加害者が連れてきたと言う真実がある可能性はある。……限りなく少ないだろうが。

『最終的に加害者のISは撃墜され、機体に深刻な損傷を負ったようです。』

謎のISについてキヤスターはこれで締めくくった。

続いて次の原稿に目を通す。やや興奮の色が唇に乗っている。キヤスターとしての食指に触れる原稿なのだろう、さらに朗々と報道する。

『学園に保護された男性は オリムラ・イチカ と丁寧な礼節で名乗り、IS委員会、警察などで男性の身元の証明を行なっています』
キヤスターの右上に少年の写真が添付されている。詰襟の少年が写った写真だ。下には織斑一夏とテロップが添付されている。

あの白髪の青年である織斑一夏の写真ではない。

青年織斑一夏（彼）を少年織斑一夏（彼）とする証明はまだ論断されていない。

『一夏君は中学生の頃に行方不明となり、また行方を暗ませた日が第二回モンド・グロッソ決勝戦の当日であり、実姉の織斑千冬選手は不戦敗となっていたため関連性が疑われていました』

キヤスターは表向きの行方不明事件の情報を朗読する。

裏向きは誘拐事件であり、行方不明となった経緯は犯人しか知らない。

ただ、ドイツ軍が独自の情報網から情報提供したが、特定場所に一夏は居なかった。誰一人、猫の子一匹千冬は見つけられなかったという。

ドイツ軍は再度調査して誘拐犯の物と思しき車両と死体が海から発見された事を報告している。また、ドイツ軍や警察機関も千冬自身も何度も海中を搜索したが何一つ遺留品等や証拠物は発見できなかった。

タイヤ跡の残る道路には、乾いた夥しい涙の跡だけが残された。

『しかし疑いだけで、証拠は何一つ発見されていません。行方不明となった理由・原因は依然として不明のままでした。もしも オリムラ・イチカ と名乗る男性が一夏君本人だと断定されるなら、事件は一気に解決へ近づくと思われます』

締めくくり、『織斑一夏君発見（？）！！』のインタビューが放送される。

母校の学校関係者や交友関係があった友人へのインタビューが流れている。

先生や友人も、もしも本当に彼だったとしても喜ばしいと好意的な話を述べている。特に定食屋の兄妹は、泣き喚きながら会いたいと主張していた。

IS学園と織斑一夏らしき男性の報道は終わり、海外のニュースが流れている。東南亜細亜で出没していた海賊が、三人組の天の御使いによって討伐されたと眉唾なニュースが流れている……。

私はテレビの電源を消した。プチッと音を立てて天使がアジアでどーたらと言っていたテレビは黙り込む。

「……………」
ベッドに飛び込む。ボフッと毛布とクッションが私の体を受け止めて柔らかい抵抗が顔と胸を押す。

頭はモヤモヤとしていた。

「……………一夏」

名前を呟く。あの日から一度も呼んでいない名前。

呼ぶと元気な声で返事して、ニカッと笑ってくれた。

行方不明になったと聞いたとき目の前は真っ暗になった。

父さんも母さんもあの時ばかりは二人一緒に慰めてくれて、それ

で——うやむやになっちゃったんだよね離婚。

あんなに喧嘩していたのに、娘が落ち込んでたら二人して心配して、元氣になったら二人して笑いあって……。

娘（私）のわからない理由で離婚寸前まで行つて、娘（私）のわからない理由でまた仲良くなつて……ほんと大人つてわからない。だけどたぶんタイミングがよかつたんだろぅな。

相手じゃなく娘に目を向けていたときだったから慰めてくれた。奇跡や祈りの果てに願いが叶ったとかじゃなくて、単なる偶然。そして一夏がいなくなつたのも偶然の事故。

……………。

父さんと母さんはそのまま料理屋を続けている。

私は一人、中国に渡つて軍に入つて専属操縦士をしている。

軍の人は、私が一夏と言う男の子の幼馴染だから色々と聞いてきたけど、応えられることはあまりなかった。両親にも聴いてきたらしい。両親も同じようなものだった。

よく、家にご飯を食^{うち}べに来た娘の思い人——そんな記憶と認識しかないでしょうね。

見返りとしてIS学園に来た男の人の情報を教えてもらった。

背の高い、髪が白くて長い、夜空のように黒々とした男——らしい。

なにそれ。一夏の容姿じゃないわよ。

でも、二年近く経つてるものね……私も色々……まあ、あちらこちらがチラホラと成長したかんねッ！

だから容姿が大人のようになつていてもそれは健全な成長だと思ふ。そんな大人の体になつた一夏を、一夏と私はどうしたいんだろぅ。

喜びたいのか、彼の身に起きた何かを嘆いて喚きたいのだろうか。テレビに映っていた弾や蘭みたいに泣き喚いて見ればいいのか。

悩んでも会えない。彼はIS学園にいる。治外法権で厳重な警備の敷かれている学園に。

IS学園……入っとけばよかったなあ。

一夏を見れて、もしかしたら会えたかもしれないのに――

――……………?!?

「――……そうだ。入ればいいんだ」

ベッドに立ち上がる。結んだ髪が活気に動く。

私は中学を卒業したばかり。おまけに専属機持ち。試験なんてあつという間に突破してやる。

決めた。ううん、決まった。

私はIS学年一年生よッ！

「――待っててなさいよ一夏あ！」

そして――IS学園で私を待っていたのは、僅かな面影以外全てを無くして、全てを失って、全く別の存在になった幼馴染だった。

日本に一つの特種国立学校がある。

IS学園だ。

IS学園はアラスカ条約に基づいて建築された、ISを使う人材を育てる特種国立高等学校である。

この学園はあらゆる国家機関に属さず、如何なる国家や組織からの勧誘は一切許されないという治外法権の立場にある。

その規律はほぼ有名無実であるが、規律は規律。罰する法が働き、それが抑止力となって学園の生徒や教諭達を守っている。

法と抑止力という名の壁に囲まれた安全地帯である。

IS学園は学校として機能する為の施設に恵まれている。

IS 操作練習の為のアリーナなどがその最たる例である。

また、学生寮も職員寮も設備に恵まれ、国立の資金の潤沢さを伺わせる。

職員寮の使われていなかった一室に、二時を過ぎているというのに明かりが灯っている。

誰かが机に向かい、白い紙に向かって作業をしていた。
織斑一夏だ。

シャープペンシルの尻を押し、芯を出す。一定の長さに調節し再び描き始める。

芸術性はない仕儀。単調に筆を走らせ記憶を紙面に記録していく。描いているのはあの世界の情景だ。写真には撮っていない、風景や人物等を自堂は描いている。

ヒト、建築物、動物、そして劔胄――

「クロシヤク」

黒白の線と面であの世界の一部が出来ていく。

黒白の色で美行をするヒトが、醜行をするヒトが出来てゆく。

黒白の輝で莊嚴な真打劔胄や水中戦仕様の数打劔胄が出来上がる。
時計の針が奏でる音と筆と紙が生み出す律が部屋を満たす。

描き刻まれた紙面の数は六十を超えた。

――と、鳩時計の音にも似た時計の電子音が鳴った。確認すれば長身と短針は五時を指している。切り上げどきか……。帰還りついでからの病原菌消毒、病院機関での検査、事情聴取等で慌ただしい日々を過ごしている。休憩時間を戴いているが、全て細々とした作業と身辺整理に使い消費している。

写画の儀も作業の一つであり、並列別世界の存在を証明する材料である。あちら側にだけある 劔胄、金神魔王尊、そして 悪鬼――

思考、発想、決断。

その思考は脈絡も無い閃きである。心の身辺整理の意が強いだろう。

記憶再生。そして実行。

描く――

描く――

描く――

紙面に出来たのは写画ではなく、心を込めた絵画。記憶を掘り起こす所作は同様だが、此れには魂を入れている。

彼等の魂を輝かせる。

彼等の在り方を刻み込む。

彼等の自堂から見た印象を描き上げる。

……。

……。

……。

――終了。

シャープペンシルと山田教諭の御好意で頂いた色鉛筆と色筆で良いモノが仕上がった。

……ヒトが近づいてくる。自堂は支度をし、出迎える。

歩調と靴音で誰が来ているかは認識している。二名――教諭二人扉が開く。開けたのは上背の高い女性――

「――御早う御座います。織斑教諭殿に山田教諭殿。

……毎朝御手を煩わせる自身に恥じ入り、穴があれば入りたい心地に御座います」

低頭にて出迎える。髪の方が板間に垂れ渦をつくる。個人では身動き取れぬ不法侵入者にして行方不明からの帰還者である自堂。不可抗力とは云え、教諭であり公に仕えている者達をこうまで忙しくさせる自身の星を恨みたくなる。

また、学び舎では姉御前は教諭――教育者である。身内の血に乗じて馴れ馴れしく名を呼ぶのは憚りならん。

「……………もう少し謙虚な態度を変えてみてはどうだ？」

「わっわっ、顔を上げてください一夏さん（……）。私たちの
お仕事はＩＳ学園でのＩＳに関する教授と指導と事件・事故の調査
なんですから」

労りの言の葉。

其の優しさに益々身が縮む思いである。座標を地面の中以外に指定することに精一杯で、他に演算が間に合わなかった自身の非才に恥じ入るばかりである。

「御厚情有難う御座います。しかし礼節を尽くすべき相手に尽くすのは不徳とは思いません。また、貴方方は礼節と敬意を捧ぐヒトと想います。次いで手妻を捧呈^{ほうてい}致します」

恭しく紙の束——写画の束を捧呈する。

「……………ああ、確かに受け取った。それとこれを返却しておこう」
返答と共に紙束を受け取る。入れ違いに長い棒状の物——見紛う筈も無き、形見の剣である。丁寧な手妻で藤色の布に包まれた其れを返却される。

「拝領」

低頭、両手を伸ばしアゾット剣を受け取る。

山田教諭殿は視線を自堂と姉御前^{あねこせ}を往復する。動揺と興奮の呼吸と微々たる発汗をしていた。御迷惑をおかけします——

「そ、それじゃあ織斑先生。一夏さん。朝食に行きましょう、ネッ」

山田教諭の号令に従い、自堂等は朝食を求めて姉御前と山田教諭を先頭に並んで歩き出す。腰元で鞘と革帯の金具が鳴る。

「そうだな。——ん？ これだけ色付きか」

「——はい。思い入れが有ります故」

姉御前の手元を見る。必然的に黒の布地に包まれた胸乳^{むなちち}でやや見え難い。

同世代の女性よりもやや硬さと厚みを持っているが繊細な印象を与える手が紙面を捲る。

——無頼の仁術家。

——鮮血の貴婦人。

——そして、装甲悪鬼。

誰も彼も縁を結んだ三名だ。紙面の中で輝き——仁、美、禍を醸し出している。こればかりに関しては中々の手妻だと自負する。

「お上手ですね、一夏さん」

視線を確認する。輪郭から外れた眼鏡は如何な使用目的であろうか。黒白の写画を見ている。普陀樂山寨だ。

「些細な手妻に御座います」

「謙遜しなくなっただけいいんですよ。美術の成績良かったんですか？」その瞬間である。空気が変じたのは。

——問いだ。

只の問い。しかし失態を悟った眼をした。姉御前が責めるような悲しむような視線を同僚と自堂に向ける。目礼にて返答。身をやや屈め山田教諭と視線を合わせる。

ミラーサンクラス
鏡面遮光眼鏡越しに、小柄な愛々しい教諭の姿を目にする。

「はい。絵画の仕事にて些細ながら収益を得た経験が御座います」

画家の小間使いであるが。絵皿と作業着を洗った以外教授された憶えはない。

「……へへ凄いですね。私が絵を描いても一円にもなりませんよ」

「御謙遜を」

「いやいや、本当ですって」

山田教諭は愛想笑いをしながら肩を落とす。
いかが
如何したものか。

臆病だが、身分は分かっているても女学園であるIS学園では完全に不審人物である自堂に対して柔和温順に接する山田教諭殿は、敬

意を向きたい女性である。

落ち込んでいる。如何なる儀で笑顔を取り戻せるか。……——小粋な冗句かッ！

世が換わり、普遍意識じゅうしきが変われば、かつて埃及エジプトの砂原よりも渴ききつた空気を生み出した冗句も、熱帯雨林が如き暑く明るく湿った空気へと変成させしめる効能が有るやもしれん。

だが過信は禁物である。自堂の諧謔センスの才能が教諭の琴線に触れなければ、只々無様な道化姿を晒す羽目になる。自堂の無様さは無問題だが、山田教諭の落ち込みがさらに底を抜けようものならば素っ首吊り下げても償いきれぬ！

あちらの世の徳と罰が報えぬ今の身の上だが、こちらの世でも罪を犯すと考えると煩悶が生まれる。

煩悶思考——

そして決断を下す。

「——ある家に」

決意した瞬間に、声がかけられた。

「——織斑さん」

先日の少女達であった。

早朝の学生寮に動く影がある。

長い黒髪を後頭部で束ねた少女。ポニーテールの剣道小町、篠ノ之箒だ。

箒は携帯電話を側頭部に当て、セシリアに小声で話しかけている。「今、織斑先生が寮を出た。剣の包みを持っていたからたぶん、……えーとあの、落っこちてきた人のところだ」

彼を幼馴染の名を呼ぶのは、今だ心情的にはばかれた。

「——で、こんな早朝に電話してきた理由がそれだけなのですか？」

向こうの声は不機嫌の色が塗られている。早朝の一番深い眠り（Non・LEM睡眠時）に無粋な電子音で叩き起されて機嫌が悪くなったのだろっ。

「……………」

『……………きります』

「わっ、わっ待て理由を言う。切らないでくれっ」

声が小声の域を出なかったのは流石としか言いようがない。

『さあ、理由の明示してください』

「えーとだな。あーとだな……………」

『感動詞をこれ以上使うようでしたら切らせてもらいますわ』

「はいっ！ 私こと篠ノ之箒はしたいです！ お話が！ 以上！」

何故か、倒置法。

『Who（主語を）』

「落っこちてきた男の人ですっ」

『When（いつですの）』

「今朝にでも」

『How
of the day』

「挨拶と一緒に食事を」

『What（なぜそうしたいのですの？）』

「——私が、織斑一夏の幼馴染だからだ」

半瞬後、息を飲み干す音が箒の耳をくすぐった。

『Good！
of the day 箒さん。』

わたくし、イギリス代表候補性セシリア・オルコットは貴方に援助を約束しますわ』

「本当かつ」

『ええ、嘘は言いませんの。さあ、玄関で待つてらして。準備をしてから向かいますので』

「ありがとうございます。恩に切るぞ！」

勢い良く箒は、セシリア（と寮室を占領されている可哀想な女子）

の寮室の扉を開けた。未だに側頭部には携帯電話を当てていた。

「……………What（なぜ、部屋まで来てますの）？」

声は携帯越しではなく、肉声で届いている。

「断られたらしばいて連れていこうと思った。——怖いからな」

「竹刀を全国大会優勝者の武威を込めて片手で振るった。その風切り音は大理石すら断てそうなちからがあった。」

セシリアは試合の感動を後悔した。ついでに、半分脱ぎかけた寝巻きのまま連れ出されそうになり、金切り声を上げた。

余談だが、幸いにも寮長に聞かれなかった。

しかし皆を纏めて非難が飛ばないよう施した橘薫子に、彼についての情報を報告するように約束をつけられた。

職員寮を抜け、学校食堂に朝食を摂りに行く途中の三名に声が投げられた。

高い少女の声である。声を飛ばしたのは鮮やかな金髪の少女である。

セシリア・オルコットだ。

帰還者織斑一夏と奇縁を結び合ったイギリス代表候補性である。

セシリアは声をかけた。かけたのは織斑——この場に織斑姓は二名いるが、先生の尊称がついてないので十中八九一夏である。しかし声をかけてなお迷っている。

——成人男性に見える、同じ齡である筈の——侮蔑してやまない——しかし、未知の兵器で命を救ってもらった男にどう接すればいいのか迷ったからだ。

セシリアは男を軽蔑している。

しかし貴族である。

貴族は恩を忘れ得ぬ。忘れた瞬間、貴族と言う位を捨てた厚顔無恥の獣である。

そのような獣では、セシリアは決してない。

しかしそのような気高い心も、男の——織斑一夏の奈落よりも深く、宇宙すべての闇を凝らせたが如き黒々しい雰囲気には、及び腰にもなる。

早朝の爽やかな、晴れ晴れしい空気に空いた漆黒の穴に対する応じ方は学んでいない。

……く、黒々しいですわね、相変わらず。

セシリアは内心冷や汗をかく。長白髪をヘアピンや朱染めの左縄で纏めて顔を露わにした男は、セシリアにとって黒い淵である。

高所恐怖症ではないが、音も光もない崖の底を覗くのはセシリアにとっても心を震え上がらせるものである。

何を食べればこんなに真っ黒になるのかしら——イカスミ・スパゲティ？

因みに少年期の織斑一夏の好物は、行き着けの店の中華料理である。

ずれた想像力を働かせているセシリア。彼女は意外と天然であった。

「えゝ、お、おはようございますすわ」

「おはよう」

「おはようございます」

「——御早う御座います。……オルコットの姫御前に……」

冷徹な、柔和な、囁れた声でそれぞれ挨拶をする。

……ほら、第さん貴方もお早くっ！ と激を飛ばす。

セシリアは貴人の笑顔をとり繕い朝の挨拶をする。その背後に何かがある。

小さな両肩に手を置いた少女である。

獵師に撃たれる鳥の尾のように長髪をはみ出させて、自身より少し小さいセシリアに隠れようとしている。

篠ノ之箒だ。

人見知りの気がある箒だが、全く別人に変貌した幼馴染にどう接していいか分からないでいた。

この少女は心が迷っていた。極少の小声で援助を要求する。

「（待て待て待てまだ心の準備ができてないぞ）」

「（目の前にしてまだ迷っておりますの）」

「（後五分、いや三分だ）」

「（朝のベッドじゃありませんのよ。三分も黙っていられませんわ）」

「（そこはほら……エルビスでもビートルズでもイギリス人大好きな歌手の曲をひとつ歌えば——）」

「織斑さん、箒さんが大切なお話があるそうですね。お二人だけで長時間密室でお話したいそうですの」

満面の笑みを浮かべ、箒の繊細な心に蹴りを入れるが如き所業。^{いっけ}

「わかった。自分で言う。大丈夫だッ！」

全国大会優勝者の握力が可憐な唇を塞ぐ。「ぐむ——！！？」迷いを抱いたまま、迷いを勇気で封印し、一步を踏み出す。

勇氣だ。彼女は家族の手によって、再会と交流を経て少しばかり成長している。ついでに頭痛と心労も得ている。昔の小さな子供ではない。

息を大きく吸い込む。

千冬と真耶は静かに見守り、一夏はただ黙して待つ。

——二人は幼馴染である。

小学四年生まで、まるで姉弟か兄妹のように過ごした間柄である。別れ、行方不明（死）に絶望しそして再開に、変わり果てた彼と

の再開に嘔吐こそしなかったが声を漏らした。

鋭く息を呑むような音を立てた怯懦の声音。両手を頭に当て、現実から逃れるように震えていた。

病原菌等の消毒の問題で移動できない四人に、懇切丁寧に謝辞を述べる一夏とも目を合わさず、土に汚れた手拭いを箒はただ握りしめて俯いていた。

セシリアと真耶は目を白黒させて、千冬は黙って肩を抱かれていた。

それから言葉も目線も交わさず、今に至っている。

そして今——二人が関係を結べる機会を算は得る。

肺腑に溜まった空気。それは活力となり、勇気をさらに奮わせて行動力へと変換させる。

桜色の唇が開かれる——

「お、おはおはおはおはオーハオーハオツパッピー」
「ラップか」

千冬のツツコミが早朝の涼やかな空気に染み入った。
重くなった空気は何処かに消え去えて二度と帰ることはなかった。
空気の読める一夏は聞き流し、しかし頭の片隅のメモ帳に記述した。

セシリアは酸欠だった。

清潔な待合室で自堂は一人、思索に耽っていた。

演算——言語と数字の加引乗除微分積分そして不確定的閃き——
思考と云う奇矯で至強な人間の知識活動。

脳と云う超高々度演算装置の活動である。

脳髄は、一つの単語を記録した知識でもって推察する。

『オッパツピー』。

—— 一体如何なる語か……。

『おはよう』の変化系か、或いは全く別の意味の単語か。謎は尽きない。

一番可能性が低いのは、十代の少女だけに流行している挨拶用語である事。しかしこのIS学園内だけで生活している身の上で、あれ以降一度も『オッパツピー』と聞いた事はない。学生等は普通に挨拶を交わしていた。

—— 一番可能性が高いのは言い間違い——

彼女の滑舌状態ならば十二分に有り得たものであり、明確に近くでいる程変化した空気は其れだったからだろう。

逃亡もまた言い間違いの羞恥からの行動と推察できる。

幼馴染（である事は此処幾数日で辛うじて思い出した）である篠ノ之箒——^{（はちまき）}箒嬢は、姉御前に突っ込まれた瞬間に踵を返して疾走した。

それは逃亡という動詞が相応しい、脱兎の如き脚技だった。

姉御前経由で聞いたが、剣道の全国大会優勝者を戴く業前の学徒らしい。よく鍛えられた健脚。同年齢の自堂と同程度の脚である。よほど労苦と努力を重ねたのであろう。

感慨と考察。朝食を摂り終え、自堂は感情と思考に意識を傾けていた。次いで別の方向へ思考が傾く。

朝食は毎回、帰還の身の上としては仕様がながい心苦しくなる程の一品だった。IS学園学生食堂勤務調理師の手によるものであり、余計な負担^{（しんど）}をさせてしまっている。

—— 早急に自活と自炊出来る立場と状況にならねばならぬ。

調理師の婦人等の手による美味な食事を、毎度七合の白米と共に胃の腑に収めた。摂取できる時に摂取する習慣が祟った。

満足した。満腹感が充足している。—— 次の昼食の品書き（メニ

ユー）は何であろうか。

食道楽染みた思考を展開する自堂に声がかけられた。

「一夏さん。どうぞ来てください」

「諒解。直ちに向かいます」

山田教諭だ。共に控え室^{いっ}を出る。歩幅は明確に違^{ちが}うが彼女に合わせ^あてて歩む。

数歩歩き、視線を確認の為山田教諭に向ける。

焦りの色が歩調に見えた。―― 軀^{からだ}が傾ぐ。

「！」

怯^{おそ}えの音ならぬ声。

傾いた軀は容易に停止し得ない。腕は無意味に空回りするばかりで重心を操作する役目を放棄している。また、脚も爪先が滑り、踵^{かかと}が浮いている。

転ぶ。如何な原因で其の所作に入^{はい}ったか不明だが、予測される原因として運動能力の不足、注意散漫による状況把握力の低下が挙げられる。

また、自堂の存在が御仕事を忙しくさせ、今疲労の極地の御鉢^{はち}が廻^{まわ}ってきた可能性――

「―― あら？」

持ち直した。正確には外部から重心を操作して姿勢を正した。

「如何しました？」

何処吹く風と問いかける。

「いえ、転びそうになっ^なたら急に安定して……」

「転びの流れに逆^{さか}らわずに動いたので安定したのでしょうか」

「はあ」

嘆息にも似た返事。納得はしていないが、受け入れている。

「とまれ、参りましょう。御急ぎなのでしょう」

「―― ええそうです。一夏さんこちらです」

「諒解しました」

早足気味になる山田教諭への注意を怠らず、自堂は急ぐ。後ろ手で縁を回収した。

やがて目的地が見えた。

重厚な扉である。機械式だが、教室や寮室の扉とは一風変わった作風の扉だ。芸術的な廊下等がある学園らしい扉である。

此の奥は学び舎の重鎮とも云えるヒトがいる筈である。

校長室。其れが部屋の名である。

「さあ、ノックしてください」

脇に控えた山田教諭が指示する通り儀を行う。

注意深く、丁寧さを心がけて叩戸

「……どうぞ」

壮年の女性の声が応答の意を投げた。

「失礼を致します」

礼を声にし、扉を開け入室する。

——とある話をしよう。

この世界ではない何処か、この時代ではない時代。

——前代未聞の敵中突破の撤退戦を行なった武者の物語である。

それは、一人と一領は、一つの意気^{のぞみ}を無人の荒野に飛ばしていた。只々一心に欲していた。

首を。

死に花を。

「ふざけるなよ手前^{てめえ}」

欲す。捨てがまりの意地を叫ぶ。

「首置いてけ！！」

欲す。退き口の完成の完成を求める。

「首置いてけ！！ 直政あ！！」

叔父上の為に敵将の首を此処に置いて行かせる。

それは永遠に近く遠くなった。

血塗の武者に無常の雨が降る。

首の希求は、帰還への行動へと変わった。

帰る。

還る。

薩摩へ。

薩州へ。

半壊の武者は歩く。

南へ。

故郷を向いて、歩き続ける。

やがて泥を踏んでいた甲鉄の足が、硬い地面を踏んだ。

否、地面ではない。

延々と続く白い廊下である。

「……………！！」

《……………！！》

声にならぬ声と音にならぬ金打声。きんたちうじき

机に向かい紫煙を燻らせた事務員らしき男が、眼鏡越しの視線を投げる。そこに興味や意思は絶無である。

読んでいた本を置く。

置かれた本の隣には一枚の挟クリップ具板と数枚の書類ボード。

その内の一枚にはこう書かれていた。

NEXT 外歴1600・1021
島津豊久

TO BE CONTINUED .

第一編／生活騎・上（後書き）

今回は日常編。

正確改変した織斑一夏とそれに戸惑う身内達の話であります。

第二編／生活騎・中（前書き）

単行本派にはややネタバレあり。

黒ベタの塗り込みを感じさせる様な文章はやはり難しいです。

第二編／生活騎・中

——壮麗な社長室がある。

南向きに張られた長方形の防弾ガラスから暖かな陽光が降り注ぎ、赤絨毯が敷き詰められた床は塵一つ無く掃き清められている。

広々とした空間は清澄な空気を湛え、高品質の調度品が気品を際立たせている。

ガラス窓を背に重厚なマホガニーの職務机が置かれ、黒革の椅子が壮年の男性の尻を受け止めている。

男性の姓は、デユノア。

男性の名は、ルイ。

IS関連業界で、また、通信部門や金属加工部門で多大な評価を受けている大会社の社長である。

通信はまるで頭に直接送り込まれ、思考を汲み取って伝える超能力の様であり、秘密の工程で加工した鍛鉄は驚異の金属強度を有する。

テレパシーの解析と神話の金属を作り出したのではないかと専らの評判である。

決して届かぬ天の星。

他の業界人が齒軋りと羨望の視線を向けるのは燦然たる太陽——
その人。

ルイ——太陽王の尊称を頂く中世仏蘭西の王　ルイ・イクシヴにも匹敵する輝かしい誉れ（かがやき）を彼は頂いている。

しかし壮年でありながら老醜の顔付きを——干魃の大地の皺を目尻に、凍土の如き不毛を前頭部に得ている彼には輝きという要素は皆無である。

疲れ——

怖れ――

彼は刻々と迫る何かに怯えて恐れている。

「――ああ、それでいい。IS学園の方はどうなっている？……

……そうか、やはり持っていたか。ああ、ご苦労だった」

受話器を置き、嘆息する。

「――また来たか。よりにもよって、IS学園の真ん中で現れるとは。彼らの存在を隠し通すのも限界に近づいてきているな……」

ルイは情報を整理する。

また、あの世界の住人が来た。

しかしどっちだ（……）。

^{ドリフ}漂流者か？

^{エンズ}廃棄物か？

行動や態度は漂流者らしく理性的だ。しかし雰囲気は闇夜の深淵より黒いらしい。

祈る。

どうか廃棄物では無いように――

あの狂気と凶気をまき散らし、災いそのものの理外の化物など見たくない――

――魔女を捜せ！ 魔女を聞け！ 魔女を記せ！ 魔女を燃やせ

！ 貴様が魔女だ――

――見よ観よ診よ視よこれが魔女だ。魔女の印だ。魔女の

^{あかし}証明だ――

――限りなき願いを持って（Summis siderantes affectibus）、

魔女への鉄槌を振り降ろさん（M

alleus Maleficarum）――

――
ツツツ！

長年様々な人間を見てきたルイは内心の思いを吐き捨て、同時に思い出し、即座に身震いと共に記憶の再生を放棄する。

今でも夢見るが、見る度に昨夜より薄皮一枚分老けていつているかもしれない。

田舎のとある村落がセイラム（・・・）のように狂い、

十の娘を両親と兄弟が四方に引き裂き、

いつもの笑顔を浮かべた息子が妻の眼前で老年の父を犯し、

赤子と幼児の群が蛆の様に既に骨だけになった女の胸をむしゃぶり尽くす。

狂っていた。

禍くわっていた。

誰もが魔女であつて、誰もが異端審問官になっていた。

全ての権力と財力を持つて警察機関と政府に根回しし、漂流者ドリフの手での奇怪な本と説教杖を持った異端審問官を殺した。

——塩になった。

同質量の、誰かの妻の様に塩の塊になった。

ルイはその光景の直後、——嘔吐した。

直ぐさま教会へ向かい、聖像の前でただ一心にルイは祈った。震えが止まらぬ様子のルイに神父も訝しみ、部下達も顔を見合わせるばかりであつた。

朝日と共に教会から出たルイが最初にした事は、漂流者への多大な感謝と謝罪と援助の約束であつた事は言うまでもない——

本クルスと杖は漂流者が嚴重に封印を施し、本社の地下金庫の奥逃れた封印用鎧櫃クルスケースの中で眠っている。部下も地下にいと震えが止まらな

いと専らの不評を呟いている。

話は変わるが、

ルイは知らぬ事だが——ニュースにはなったが偶然同じ名前の漂流者で行方不明の少年だとは思っていなかった。

さらに治外法権と情報規制が働き断片的な情報しか手に入れられなかったからでもある。

別の視点と方法から集めた情報を後で聞かねばならぬと思っていた。後にしようと思った。

そして漂流者と廃棄物という世界を超えた者共を知ったが故に、思考が狭量になっているのも事実だ。

だがルイは杞憂だ。

結論として言えば、彼は漂流者ドリフターズではない。

あちらの世界へのこちらの世界の漂流者ドリフではある。

彼はこちらの世界へのあちらの世界からの帰還者リターナーだ。

その違い。

漂流者ドリフでも廃棄物エンスにも入らない、帰還者イレギュラー。

それが彼だ。

思考に没頭している訳にはいかない。業界最大手に成ってから、経営を持ち直してから仕事量は格段に増えた。一杯の茶を飲む暇すら惜しい身分である。

書類を手に取り、サインと捺印を繰り返す。

仕事に没頭し、不安と恐怖を忘れ去る様に作業を繰り返す。

「——ん？」

脳にラジオ電波が突き刺さるような感覚が走った。

合図である。寄越したのは漂流者ドリフだ。来る——

——それは七年前の話になる。

当時八歳であり、母方の姓であるコルベールを名乗っている少女

は、学校の帰り道に漂流者にであつた。

それは彼女の人生を大きく変える邂逅であつた。

それは少女の認識を大きく広げる遭遇であつた。

それは父無き子に、父にも似た愛情を送り、

それは夫無き女に、夫にも似た情愛を与え、

それは縁無き男に、家族にも似た縁を得る出逢いであつた。

男は少女に自身の事を翁の愛称で呼ばせ、女には名で呼ばせた。

——出逢いを経て、彼らは結び合つた。

紫なる者が、如何なる理由と考へを持って此処へ漂流つたのかは、彼の米寿に迫る齡で培つた理知と叡智を持つてしても不明だ。

此処へ、仏蘭西へ送られた。ある日突然に。

京より地球を半周する程遠い異国の地へ流れた。

彼は、文化も言語も時代も世界も違ふ——神無き（・・・）大地の漂流者となつた。

最初の一步を踏み出したその瞬間に現地人と出会つた。

その事を今でも思い出す。

平安の世におらぬ人達だ。平安の世におらぬ思想の者達だ。情と
言うものがある。

不快ではない——

むしろ歡喜——

だから、

斃さねばならぬ。

殺さねばならぬ。

守らねばならぬ。

人を、この神無き大地を廃棄物の手から——

想——

思——

平安京からの漂流者^{ドリフ}は、神無き世界を守ると誓った。

そのように貴族であり、極東最高の術者である漂流者を思わせた少女は、ただの少女だ。

ただの愛人の子である。

百人に向かつて石を投げれば、その一人の子に中るだろう。そのようなただの、凡俗の少女である。

一人、友達を連れず気分で寄り道をしていた。

気持ちとその当時の子供の思考による行動である、寄り道は。そして、歩いている途中に扉を見た。

茶色のチョコレートのような紋様の扉であったそう。

リビングに繋がるドアのようなそれは、空中に浮かんでいた。

道の真ん中で、道から十センチメートル程上に浮かんでいたのだ。円らな眼を大きく見開く少女の眼差しを受けて、扉は軋む音を立てず開いた。

そして踏み出す、袴の足。

彼女は当時こう思ったそう。

——……まほーつかいだ！！

彼女が魔法使いだと思った男は、成程——平安文化を解しない仏蘭西人少女にとって魔法使いの装束に他ならない。

それは平安時代の貴族の装束であった。

特に烏帽子は魔女の三角帽子にしか見えず、肩に乗る（……）嫌に金属質な鼠もまた、魔法使いの使い魔にしか見えなかった。

子供という者は存外怖いもの知らずである。

大人であれば驚愕と不思議さに呆けているのが精々であるが、子供は正の感情に従い率直に行動に移す。

その感情の名は好奇心。猫をも殺す感情である。
少女の人生はここで大きく変わる事と相成った。
別の道と可能性は、彼の指名と魅力に殺された。

ついで、十五の齢に見られる強い行動力は、この当時から片鱗を伺わせていた。

「まほうつかいさん！ まほーを見せて！ ねえねえ！」
「ぐはあ！？」

全くの未知の風貌、全くの未知の装束の、全くの未知の言葉の少女が自分に体当たりしてくる。

大和（日本）最高の陰陽師の尊号を戴く彼は、少女の体当たりから、尻を不格好に付く転倒から現代仏蘭西国の生活は始まるのであった。

創甲道化織鐵

歸郷編

第二編／生活騎・中

——ああ、こいは夢だろうか。

コイツらは誰じゃ？ いやに肌が黒か。……蝦夷えみしか？

「うわあ。なにこれ！？ 血まみれ！！ 血まみれの海賊！？」

「いや、海賊じゃないぞ。見たこともない人だ。それに鉄の鳥まである！ 壊れかけてるけど」

なんち言うてるんじゃ。大和語やまとのこたばしゃべれよう。

「じゃあ、やつぱり……」

「ああ、離れ島に住む　ムーシャ　の仲間だ」

「ええ、また（・・）！　ど、どどうしよっ！」

「どうするってお前……連れていくしかないだろう。離れ島の　ムーシャ　のねぐらに」

「村は？」

「連れていったところで医者も呼べない。海賊のせいで荒れ果ててんだ。それにあの変な連中なら傷を治すことも――……たぶんできる」

「だぶんなの？」

「だぶんだ。さあ、大八車を引つ張つてくぞ」

ムーシャ　？　ムシャ？　……武者？

武者がおるんか！？　どこのモンじゃ！！　井伊かあ！！

首イ置いてけ井伊直政ア――！！

《トマーレ！》

「うわ、頭が！」

「ぴりぴりするよう！」

《サワグナ。コレ以上サワイダラコロス。コレ以上島ニ近ツイタラコロス》

金打声か。何を言うとするんじゃ。それにここは船ん上か？

《何ノヨウダ》

「コレ、あんたの仲間だろう。死にそうなんだよ。治してやってくれよ」

「ほら、コレ。――　ムーシャ　。落ちてた。拾った」

騒がしい。揺れる。

《………！　船ヲツケロ。ツレテーク》

揺れなくなった。陸か？

「相変わらずわけわかんないよ」

「早く行こうよ。お父さんもお母さんも心配しているよ」
声が遠くに……。なんか寂し……。

「……武者か？ 劔冑もある。この者はお前の御堂か？ 大和の者か？」

そうじゃ、俺の劔冑は無事か。おい、さ……。さ……。

暗い。

昏い――

――親父おやっどがおる！

「豊久。豊久！！」

初陣で首級か！！――良か！！ 良か若人にせじゃ」

武者姿の親父が、武者姿の俺おいを抱き上げ褒める。

ああ、親父おやっど。お豊は養父おやし殿を生かしました。
良か養父殿でこわした。

お豊は良か息子じゃったろうか。
首をとれなかったのが残念でなりませぬ。

「豊久」

親父。

次こそは必ずや首を。

「親父おやじ!!」

「おう、起きたな。頑丈な奴じゃのう。一日寝こけてその元気かい」
知らん男の声が、馬手側みぎから聞こえた。

東南アジアに、百歳を超える御隠居も名を知らないような島がある。

目と鼻の先にあるとても小さな島だ。マレー半島に比べれば猫の額と言ってもいい面積だ。

水が湧き小動物が生息しているが、わざわざ移住する事もないので隣村からは放って置かれている島である。

第二次世界大戦中に外国軍が塹ひくえにした際に、様々な物品や簡易建物が捨てているが、何処の村人もゴミを回収しに来たりしない。鉄屑くせつを売り払うにしても船を出す時間と労力が馬鹿にならないからだ。さらに変な連中が住み着き、頭にラジオのような電波を流し込んでくると言う噂が立ち、益々隣村の住民は近づくなくなった。

そして海賊の問題もある。

東南亜細亜は海賊の宝庫だ。外法者アウトローばかりの町があり、思いも寄らぬ処ところから船虫ふねむしの様に湧いて出てくる。湧き出た虫は陸へ上がり、家々を貪るのである。

そんな社会の喧噪けんそうとは真逆ハクトルの方向に島は喧しくなっている。

騒がしい。

騒乱。

騒ぎ立てて暴れているのは包帯だらけの一人の男。

少年らが連れてきた武者である。夢では 豊久 と父に呼ばれていた。

「誰だ! お前めしつ、誰だ!!」

刃渡り三尺を超える大段平を片手に問い詰める。おおだんびら

大段平、南北朝時代に多く見られた野太刀である。その刀刃は重
ねが厚く、長くて重い。

よって軋む。体中が搾られ、鉤で搔かれるような痛痒感が治りき
っていない体を苛む。

しかし薩摩隼人の武士は、瑣末の一言で危険信号いたみを振り飛ばす。

「誰だ？ そち（・・・）こそ誰ぞ」

嫌に耳につく甲高い声だ。

金属光沢の艶美しく、長尺の赤銅色の鉄砲たねがしまを元気の良過ぎる豊久
に突きつける。木目——つまり木製の部分など一つとしてない赤
銅色の大種子島である。砲口は拳が入るくらい大きく豪壮だ。

武器を構え、鬼氣に浸る武者二名。

大段平を向けるのは精兵とよひさ。ざっくり切った短髪に、向敵相を造つ
た均整な面魂の男である。

身に巻かれているのは貼り付いた包帯。所々血が滲んでいるが、
血氣盛んな若武者の気迫は一寸とも損なわれていない。

向かつて種子島を突き付けるのも精兵。伊達者のように右の片眼
に眼帯を巻いた、蓬髪長髪の下に不敵な笑みを浮かべる豊鑠とした
五十路男。

擦り切れた袴に、長着を晒し羽織を羽織ごろの如く脱ぎ晒し腰で
留めた身なり。元は上質だろう品は長い年月ですっかり色褪せ、汚
れ擦り切れている。さらには歌舞伎者の様に腕輪に首輪に耳輪と飾
り付けに枚挙に遑は無しいとま——

共に和装。

共に東南亜細亜では異装。

共に同じ文化に属する者である事を証左している。

九分の反りの鋒が顎鬚の下を刈り取らんと輝く。
頭を木端の如く散らせる砲口が眉間を圧迫する。

一触即発。

それを留めたのは脳を指す三つの金打声だった。

《御堂、待たれよ。この者らは敵では無し》

《吉光は応える。吾等主を助けし》

《Love & a m p ; p i e c e 》

連唱するかの様に紡がれる金打声の鉄琴を打つような音声だった。

焚火に区切られた影から朧と大きな影が這い出てくる。

?? / 鵜うしだ。

しまつとり（・・・） と呼ばれる水鳥である。

しかし大きい。一丈（約三メートル）に届く高さに頭がある。

罫割れて跛びっこを引く足は鳥らしく細いが、常の鳥の四倍はある。まるで駝鳥の足だ。

そして奇怪なる事に、器械きぎなる事に金属光沢を持っているのである。

金属。鉄。——これは甲鉄で出来た焰めいた赤色のしまつとりであつた。

今は罫と割れ目に覆われているが、無傷の場合さぞや豪壮であつただろうと思わせる貫禄振りである。

「笹貫ささぬきい！」

現れた鵜に快哉を上げる。呼んだ名は六十四代続いた薩摩國の刀匠、橋口正国を初代とする波平行安派なの銘だ。

《御堂。この方等は敵ではない。御堂を助けた子供等から引き取つた者達である》

諫言かんげんを言うと共に、暁色の眼差しを種子島の男の背後に向ける。

笹貫と呼ばれた鵜と同様に影から、大きく、竹の如く長く伸びた影が這いずってきた。

それは、鉢植えであつた。

薬壺型の植木鉢にキク科の真っ直ぐな茎と長楕円形の葉が基部から茎を抱くように、光背を思わせるように広がっている。

夜中だからだろうか、頭状花序の花弁は閉じていた。

やはり巨大。一丈を超える高さの花がある。

そして金属。生きているかの様に生々しさを感ずる鉄だ。

東方の浄土のような、穢れ無き瑠璃色の甲鉄を持った薬師草の鉢植えであつた。

しかし鉢の底から太く長い根を六本も伸ばして本体を運ぶ様など、夢に出てきそうな気味の悪さだ。軟体動物が歩く様な光景である。

根の触手が運ぶのは鉢と花だけではない。

鉢の縁に座る怪物型の護り像も運んでいる。ガーゴイル

西洋では一般的な西洋悪魔を模った赤銅色のガーゴイルである。

しかし、金剛力士阿形像のように厳めしく開かれた口（頭）はなく、頭から腹にかけてゴツソリと空洞が走っていた。

こちらは座り込んだ状態で三尺程の小型である。

三つの鉄の動物は、ある共通した制作方法を経て、此処に存在している。

——鍛冶師の身魂を打ち込んでいるという事である。

真打の劔冑（ツルギノクルス）だ。

劔冑の諫言を聞き、昇った血が僅かに下がる。しかし油断なく男を見据える眼差しがふと、背後のそれを注目した。目がかかった。

布。元は旗か、掛け布にでも使われていたと思しき大布である。

その真ん中に絵があつた。

紋。家紋である。

——もっしゅもん 木瓜紋。

「木瓜紋……織田家家中の者か？」

「家中う？」

笑みを作る唇が濃く動く。心底可笑しいと言う風情だ。人の感情

など無い薬師草と西洋悪魔像の劔冑もまた、浅慮に嗤っているようだ。

「虚けを抜かせ。織田とは俺で。俺とは織田よ」

己を語る。

己こそ織田と。

己こそ鎌倉の世を終わらせ、戦国の世に燦然と輝く覇を残した者であると。

「誰だ手前エ！！」

激烈な誰何に、男は銃口を下ろし胸前に持っていく。

「——俺は信長。織田前右府信長である」

果てしなく長い、時が止まる沈黙を破ったのは、繊維質の切断音。血管の切れる音と共に大段平が首を刈り取らんと振るわれる。

うつけだ。

うつけは貴様だと争う武者二名。

てめえは死んだ。死んでおらぬはうつけめと大暴れ。

あの世じゃ鬼じゃ、亡者じゃいかれじやと騒ぎ立てる。

瀕死の者とは思えない胴間声。百の蟋蟀の大合唱より騒がしい。

再び喧騒と武威に身を置く御堂ぬしを止めたのは金打声の諫言ではなく、一本の十二束三伏せの矢。

岩肌を晒す壁に、罅も走らせず、砂もこぼさず深々と突き立つ武者矢。

「やめなされ」

妖美なる声音の諫言が二人の耳朵を妖しく翳った。

豊久は、その者が少年か少女かは一目では判断できなかった。
焚火の影から銀の風光明媚を輝かせる三日月の背後から進み出てくる者。

争う二人と同じく和装。それも貴族的ではない、実用的な狩衣姿。少年期か青年期か断定しにくく、また、男女どちらか分からない中性的で——艶めかしく、あやしい（・・・）美貌と体つきの人であつた。

長く鴉の濡れ羽に艶めく髪を組紐で結っている仕儀もまた性別を分かりにくくしてある。

六尺に届かんとする大柄な豊久に比べ頭一つ程低く、右袖のない着物から伸びる右腕は儚げにして華奢である。

対して、弓手には——武者弓^{ひたりて}。

固くしなやかなキチン質の様な質感を持つ劔冑の武者弓だ。

ならばこの年齢と性別不詳の人は二名と同じく武者に他ならない。右手の大鋏に狩猟の獲物を乗せて、半身で待るのが劔冑だ。

蟹。

濃紺の甲鉄を得ている蟹^{むかで}。

後ろに歩けない様が蜈蚣^{むかで}と同じく武士の縁起物として扱われ、さらに卵を抱いて育てる事から慈母の象徴とされている。

弓矢と蟹の共通点の話になるが、扇の骨の交差した部分を綴じ合わせる為の釘を要^{かなめ}と言ひ、別名を蟹の目^{かにのめ}と言ふ。

十二世紀の日本にも大和にも、人が点にしか見えぬ距離から、寒風吹き荒れる船の上の扇の的の要を射貫いた武士がいるらしい。しかも用いたのはどの国の方も、強力な武者弓ではない。

——とまれ、美人と蟹である。

「目が覚めましたか。重畳重畳」

奇妙な奇矯な組み合わせに、美貌に当てられたかのように豊久の顔が歪み、引き攣る。

それを素通りして焚火の側へ近寄り、信長へ何かを差し出す。大鉄に挟まれていた海鳥の死体だ。縊って血抜きをしてある。

「羽をばむしり（・・・）候へ」

「……ああ」

気の抜けた返事。黙って羽を筆る」

ぐりんと振り返る。

「お手透きか？」

「あ、ああ……」

「むしり候へ」

すっと差し出される縊った鳥。受け取る。

焚火を中心に羽を筆る音がする。

焚火の側で人間の手に近い赤銅色のそれが魚の鱗を削ぎ、海藻を干している。

「なんだこれ」

なんであろうか。

《——ルイ。こちら機関長。応答を願う》

《——こちらルイ。いいぞ》

《発見。発見した》

《本当か。何処だ？》

《故国の坤の方角。——東南亜細亜だ》

《わかったすぐに向かわせよう。……でどっち（・・・）だ》

《不明だ。上手く探索と漂流が重なったから感知できたのだ》

《……最高戦力を注ぎ込む。いいな》

《ああ、いいぞ。……あの子には苦勞をかけるな》

《弟子だろう。最高の陰陽師。信じるよ》

《ああ、まったく。あの子には聞かせられぬ。大師匠の威厳がなくなってしまう》

《薔薇の下にかくしておかなければな》

《ああ、薔薇の下に。——取りあえずマレーシアに飛んでくれ。その方が近い》

《伝えておくよ。それとご老人二名は元気か？》

《熱帯の気候にも負けず元気にしている。戸籍と渡航の用意は出来ているか》

《もうすぐだ。じゃあ、仕事があるのでな》

《わかった。それと実妻殿に化粧品がある。部下殿に渡しておくぞ》
《ありがとう》

一切の記録に残らぬ通信は途絶えた。

「集めねばならぬ。集^{つと}わねばならぬ。合流せねばならぬ。

我々、漂流者^{ドクト}は全てを使つて挑まねばならぬ」

二枚の写真を見る。

「黒王。^{こくおう}——貴様はどこにいる。

世界への憎悪を懷いたままいつまで穴熊を決め込む。

人間への憎悪を抱えたままいつまで牙を研ぐのだ——」

写真が撮れた事、廃棄物の王である事以外まったくの不明である

黒王（BLACK LOAD）の事を思う。

「例外よ。^{おじむらいちか}——貴方はどちらだ。

世界への憎悪無くどうしてそこまで黒々しい。

人間への悲哀無くどうしてそこまで——そう在れる（・・・）のだ」

黒王と違い色々と彼だけの手腕で調べられたが、黒王以上に理解できない帰還者の事を思う。

金打声での会話と同じく、誰にも気取られる事無く、思いは虚空へ溶けていった。

薪が爆ぜ、焦げる音がする。

炎の舌が薪の味と酸素の酒に舌鼓を打ち、熾^{ひかり}った輝がおんもらと七つの影を照らしている。

大気の海に泳ぎ出す熱は海鳥と魚の串刺しを炙り、昆布を乾かしている。

それをじつと眺めていた三つの影の内、真ん中の一つが口を開いた。

長く伸びた無精髭を蓄えた口で羽を弄びながら問いを投げるのは初老の男。信長だ。

「信長は死んだ……、とか申したな。やはりわしは死んだ事になっているのか」

「……おう！ 死んだ！！ 京の本能寺で明智勢に弑逆されたわ。もう十八年も昔の話よ」

信長に語って聞かせたのは本能寺の変。天正十年明智光秀が織田信長を京都の本能寺で襲い、自害させた歴史有数の大事件である。そこから天下分け目の大合戦。世は戦国の乱世へ逆戻りした事件である。

信長は瞠目した。見開かれた眼が熾り火に照らされ鬼火のように茫^{ぼう}々と輝く。

「な……に……ッ、バカを言えい！！ 十八年だと！？」

側の木箱を蹴立てて立ち上がり、吼える。

「金柑頭^{ハゲ}が本能寺に寄せてきたのも、

この世界に俺が吹っ飛ばされてきた（……………）のも、まだ半年と経っておらぬわ！！」

豊久にとって十八年前の事件を半年前だと訴える織田信長と名乗る男。

「フン」

嗤うしかない。嘲笑い、物狂い（いかれ）と断ずる他無し。

「だから言つたのだ。お前はあの世の亡者が鬼か……。でなければ物狂い（いかれ）よ」

冷淡に断言する。親父おやっどに聞かされた事件が、親父の勘違いか嘘かになつてしまふ。しかし思いと裏腹に、もしかやと豊久は思う。

ありや——信長の宝物の一つではなかか……。？ 確か、藤四郎物の……。？

考え込む信長と配下の劔冑達。

それを打ち破るかのように忍び笑いが漏れていた。

「……くつくく。あつはつはつは」

嗤う。笑う。可笑しいなあ、と笑い転げる美貌の者。

癪に障り、しかして疑問が先に立つ。

「十年、十五年で甲鉄共々おおさわぎにされておるのが、なにやらもう——

おかしゅうて。おかしゅうて」

ひひひ、と悪戯小僧のように笑う。

「あんたは……何者だ」

と、疑問を口に、

「言つてやれ。言つてやれ」

信長は鼻で笑い、驚かした分驚き抜けと期待を得る。

それらを受け、応えた——

「私わたくしは与一」

それは十一（十の余り）を表す名。それは高名な弓使いの名。

「なすのすけたかよいち那須資隆与一で御座います」

本日二度目の沈黙による驚愕の衝撃が、豊久の身魂を打ちのめし

た。

そして本日二度目になる叫びにも似た胸間声が島々に広がった。

「嘘をつけえい！！！！ 源平合戦の頃じゃねえかッ！ 四百年も昔の話ぞ！」

——そんな、そんな馬鹿な話があるものか！！！！」

銅鑼を叩くような音声の詰問に、

「ん——。馬鹿な話とおっしゃられましても。私は私で御座いますれば」

慣れた風と受け流す。与一。

「これは夢だ！ 間違いなく夢だッ！！」

悪い夢から醒めると自己暗示するかのようにな念仏のように呟く。

「——でおまえはどこ（・・・）誰ぞ」

問い。そう言えば言うてなかと思ひ出す。

「…………… 島津。島津豊久。島津家久が子じゃ」

力強い、家を誇る名乗り。しかし——

「島津……誰？」

「う——ん？」

両者とも頭を捻っていた。劔冑も捻っていた。

「おう！ 九州のはじつこの！？ ものすごい田舎の！？」

ようやつと信長は、混沌と溢れる戦国武将家から当たりを引いた。しかし辛辣しじゅうだった。

劔冑の騎航による超長距離移動が出来ると言ってもそんな開拓者魂全開の仕事を武者——武士階級の者はしたりしない。空の果てまで飛んでみたいと希求する物好きもいるにはいたが、大概家に止められている。

「殺・す！！！！」

殺意を滾おんせいらせた怨声を吐く豊久。

「島津殿なら私も知っております。私の御世にもおられましたぞ」
「む」

与一の既知だとの声に、期待を込めた眼差しを豊久は注ぐ。

「確か九州のはじつこの方の御方です。ははあ代々田舎の方々なのですね」

信長と似たり寄ったりの評価であった。――豊久は激怒した。

「全・員・殺・ス!!」

野太刀を変則武者上段に構え、先祖代々一族郎党皆馬鹿にされた瞋^{いか}懣りをぶちまけんとする。

「まあまあ。いくら劔冑の加護がありますとも。激しく動くと死にますぞ」

「元気な奴だ。まあ座れ」

豊久の激憤も信長と与一は沈着に諫める。

吠え声が犬の雄叫びじみた物悲しさを奏でた。

啾々と。

夜の黒海に一つの影。

推進機^{エンジン}関搭載のゴムボートだ。静音仕様で隠密性に優れた品である。

騎乗するのは金髪の少女と栗色の髪の男性。兄妹ではないだろうが、共に闇に溶け込む迷彩服を着込み、寒風除けの毛布を頭から被っている。

「……どーです。お嬢。何か聞こえましたか？」

「うーん。もうちょっと近づくか、集音マイクの解析結果がでないとわからないよ」

「わかりました。データを下さい」

「はい、どうぞ」

入力装置を弄り、端末を操作する。海上で小さな電子音の旋律がハチドリ^{ハチドリ}の合唱の様に流れる。

「でました。イヤホンを付けて下さい。……流します」

少女の準備が完了するのを確認すると、黒手袋の指がEnterの鍵盤を押した。

「……だれぞ……もっこう……んうふのぶな……うつけめ……なされ……むしりそ……」

次々と集音された結果を呟く。中世期の大和語も彼女にとっては慣れ親しんだフランス語と同じ様に聞こえる。

「……あけちぜい……しいぎやく……じゅうはち……このせかい……いかれよ……だいぞ……いち……けたかよいち……うそをつけい……げんぺ……もまえの……いえひさ……しまづ……ころす……うん、もういいよ」

「どうでした？ おわかりになられたことは？」

中世大和語は現代日本語以上に分からない男は、少女に尋ねる。

「あそこの島にいるのは三人。それも同じ大和国の人たちだね。劔^{ルキ}冑^ツの反応もある。

じぶんがどうしてか、今までいた世界とは別の世界に来てしまったということだけ理解しているみたい」

「お嬢、本当に、つまりは……」

生唾を飲み込み、辿々（たどたど）しく尋ねる。

「——^{ドリフターズ}漂流者だよ」

男——デュノア社特別仕様機材開発課兼社史管理課社員フィリッブは、心底安心の息を吐いた。

仕事の相方の様子を尻目に、少女——デュノア社専属操縦士シャルロットは水晶玉を取り出し、電波に寄らぬ通信を開始した。

「こちら——こちら——セム。応答願います——」

《——！　ダレーダ！》

風が唸る首の振り。フィリップの首が一点を向く。

「……………あ。」

あああああばれたあー！！！！？」

頭を刺す、良く見知った音質にフィリップは金切り声を上げる。
声は海上を無意味やたらと泳いでいった。

これが始まり——

これが漂流者達による最初の国奪り。

その切掛の一つ——

世界平和の為に少数を犠牲にする。

海賊は——つわもの兵士となる。

チェス盤がある。今まさに決着が付こうとしていた。

ナイト白の騎士がキング黒の王を討ち取る。

チェックメイト王手。

「あ」

「チェックメイト。ははは、十七勝目じゃ」

「ちよつと待て。ローマ人的に待て！　待っただ」

「いーやーじゃーよー」

「くそう！　今度はコイツで勝負だ」

《……………》

「おーおー、来いよパクリ野郎」

《……………》

「じゃかあしゃあ！！」

食卓が宙を飛んだ。

医局がある。

IS学園専属契約医師と看護師が勤務する医局だ。

彼等は一人の男性の診察結果で持ちきりなっていた。
フライバシー
個人情報重視する医師達は騒ぎ立てたりしない。

だが此処には、どんな騒音よりも重く、耳に嫌な音声が残る沈黙の五月蠅さが支配していた。

沈黙の騒音、である。

「これは……本当なんですか……」

個人情報を開示して良い相手は存在する。

本人。若しくは肉親である。

「ええ、残念……いえ、診察結果がどうであれ、彼の診療簿はこれ
カルテ
です。」

そしてそれが覆る事はありません」

医者顔は弔辞のそれである。

健康診断結果をこの様な形で出すのは、長い医者的人生で始めて
である。

「……………」

沈黙。貝の様に口を閉ざしたまま何も言わない。

顔は能面の様に凝ったまま、引き絞られた角膜が小さな瞳を造る。

震える手に持つのは診療簿
カルテ

織斑一夏の診断結果である。

一目見た瞬間に暖簾を下ろした精神科・心療科以外、脳神経外科、
心臓外科とほぼ全ての診察を受けた。

その結果が数枚のプリント紙に印刷されてある。

狂った結果が刻印されてある。

「あの、言うタイミングというか、言うべき内容じゃないと思いますが……気を落とさずに。彼は丁寧な礼節と態度を持った青年じゃありませんか——」

事実を拒絶する。

機能：体液循環。他不明

年代：加工時期は400年程前
存在年数は数万から数十万年以上

後日、人工心臓に数ミクロンの文字列が刻まれている事を発見。
解析結果を下記する。

中世ドイツ語でHappy Birthday・と記述。

I ■ H I ■ A へ

P ■ ■ ■ C ■ L ■ ■ S より

1541年9月27日……………

T O B E C O N T I N U E D .

第二編／生活騎・中（後書き）

ドリフターズ第一巻。前半部を消化終了。

中間や後半もそのうち書くと思います。

今編は主人公の台詞無し。しかし新事実発覚。どうなる——！？

シャルロットの父親の名前はオリジナルです。

第三編／生活騎・下

織斑一夏と言う人間は、姉と同じ胎から極々尋常に生を享けた。

それは母子手帳や当時九歳であつた織斑千冬が証言し、出産を請け負つた医院や医師や看護師も同様の意見によつて認められる。

精子と卵子の結合があり、ほかの数十億の赤の他人と同様の生化学的現象により姉とは別の染色体を選択して男性として胎内で成長した。

胎教に悪い行為を母体が強行した事実は見受けられず、昔年の父親が悪魔崇拜や黒魔術儀式に耽溺し未来の生贄に我が子を選んでい たと言う事も無い。

助産師が致命的な失敗をした事もない、産児保育室に異常事態が発生した事件もなく、母乳や離乳食に危険物質や環境ホルモンが一定濃度以上含まれていた事もない。

三ヶ月や或いは二十ヶ月と言つた異常期間の妊娠を経た事もない。産まれてすぐ人語を解し、歩き、歯が生えそろつていた事もない。極々標準的な認識期間を経過して、極々標準的な体重と体格で彼は産まれた。

健康な男児としてこの世に生を受け、一般家庭の生活を物心つく前まで享受していたのである。

その物心つく前の年に、両親が失踪した。
理由は一切不明である。

実姉の友人である篠ノ之束の関与も疑われたが、証拠もなく、また人間として認識している存在が三名だけと言う束にとって友人の両親などただあるだけの肉人形に過ぎない。

兎も角――

彼等の両親はいなくなつた。

幼い姉弟だけが残された。

その頃から姉の弟への言動に変貌が見られる様になった。

“——お前の家族は私だけ。一夏の家族は千冬^{おねえちゃん}だけよ——”

その言葉には、自分達を捨てた両親の恨みや辛みが含まれていないとは否定できない。

しかし、物心つく前の弟に両親の不在と言う重みと苦しみを感じさせたくないと言う優しさも確かにあった。

そして両親への愛が与えられなくなった姉による愛の濃度の補完もあった。

弟の愛を自分一人に向ける事で足りない両親分の愛情を補おうと言う、少女の寂しさを紛らわせる拙い行為があった。

厳格な性格として知られた彼女でも、父母の愛称を呼べない日々は寂しいものであった。

その浅慮な躰が、悲劇を生んだ事は一切無い。

姉もまた、十年前の重大事件の片棒を十四歳の時に担いだとは言え、尋常な少女である。

女性に対しての鈍感さは天井知らずに増加したが、これは姉の対異性教育の失敗ではなく弟の生来の気質である。

偏愛による近親相姦の悲劇の道も幼さと真つ当な精神により、弟も姉もその道から遠ざかった。

あるのはただ両親がいなくとも仲睦まじく暮らす姉弟の姿だけであつた。

彼は人間として正しく生まれ、正しく育ち、正しい人間になった。それは厳然たる事実であつた。

剣道道場の幼馴染と性別の差を超えて仲良くなった。家族ぐるみで良好な関係を結んだ。

彼は良い少年だった。

姉は良い少女だった。

剣道道場の幼馴染が男子の集団に苛められていたのを目撃したら、矢も楯もたまらずかばい立て、仕返しをした。

彼は良い少年だった。

姉は良い少女だった。

苛め返した事実が問題となり、保護者監督の不行届きの責任を姉が被った際は、姉への申し訳のなさから、より良く考えてから行動を起こした。

彼は良い少年だった。

姉は良い少女だった。

中国人の友達ができ、その友達がからかわれているのを見て庇い立てた。

彼は良い少年だった。

姉は良い青年だった。

友人の中華料理屋に呼ばれ、その友人の両親の手料理を御馳走になった際はきちんと代金を払った。

彼は良い少年だった。

姉は良い青年だった。

IS操縦士として多忙を極める姉の変わりに家事全般を賄い、剣道をやめてアルバイトに精を出した。

彼は良い少年だった。

姉は良い青年だった。

しかし――

だから――

だから、弟はこうなった（……）。

創甲道化織鐵

帰郷編

第三編／生活騎・下

「——お招きに与り参上しました。織斑一夏に御座います」

体を深く二つに折り曲げて低頭をする男。

白寿の老爺の如くしわが噎れ、幾星霜もの年月を経た重みを感じさせる声だ。それが十五疊程の広さの室内を泳いだ。

声の主は自己紹介の通り 織斑一夏 と申す、二十歳程の青年である。

しかしながら老人の皺の一つも無い健康的な黄色人種の肌艶と若木の様に高く、鍊鉄の様につよ靱く伸びた長身は、老いと言うものを感じさせない。

しかし——またしかながら頭髮だけは、女性よりも髪が伸びるのが遅い男が生涯を掛けて伸ばしたが如く、それも織り上げれば一反の織物が出来るのではないかと思われる程長く、量が多い。そして毛の荒れと染みを除けば見事な総白髪であった。

その白の洪水と受け止められる髪を多量のヘアピンや朱染めの左縄で止め、纏め、束ねている。女子の数杯の量の髪飾りを個人で使っていた。

服飾に関しては老若の混ざった——若しくは明治大正期の和洋折衷の装束であった。

鉄紺色の長着に擦り切れ、色落ちしたデニムのジーンズ。足を覆うのは軍の放出品と思しき、分厚く滑りにくさを追求した鉄板拵え

の長軍靴。^{ミリタリーブーツ} 逆に手を覆うのは上品な薄手の革手袋である。

腰を回るのは帯ではなく、カウボーイが使うような骸骨衣装のバツクルのベルトが二重に巻いてある。

ここまで異装を銜^{てら}つていながら長着の中は無地のワイシャツである。

彼は何を主張したくてこの混淆装束を選んだのか謎は深まるばかりである。

解答を述べるならば、実用性と経済状況と貰い物と思い出の選択比較無頓着が彼をこの混装^{こんそう}に足らしめた。

自身だけの問題の場合、途端に見た目に拘泥しなくなる性分の所為である。

ただし他人の目が入る場合、見事且つ礼に富んだ着こなし方を魅せる……。

因みに実用性だけ述べるならば、自前のコートを着用しても舞踊でも新体操でも踊れる程、全く動きを妨げていない仕立てである。

さらに佻^{てう}しい事を言うならば着た切り雀であった。下着類だけは支給して貰ったが、ずっとこの装束を通していた。

——とまれ、声は泳ぎ、届かせるべき三名に届いた。

優雅な職務机を前に座る老年に近い壮年の女性——IS学園学園長（表）轡木倉子はそれを真摯に受け止めた。脇に控えるIS委員会関係者と警察関係者の二名も受け止めた。

「……はい、どうぞ顔をお上げになって下さい。織斑^{おりむらいちか}一夏さん」

動作が一呼吸分停止した轡木学園長は、丁寧な礼節に同じくらい礼を込めて返した。

下賜された言に一呼吸分の余白を持って応じ、伏せていた顔を上げる。

入室前に外した鏡面遮光眼鏡^{ミラーサングラス}が隠していた眉目が彼等に晒された。彼等の呼吸は息を呑む動作を得、そして圧迫感ならぬ吸引感を得る事となった。

——黒い。

彼の目は射干玉めばたまの深淵の様に黒々としていた。

彼の双眸ひしめは黒であり、夜の様な色彩を描いている。

しかしその色が、彩かがやきがわからない程、雰囲気の色とも言える要因が一切の視認を拒否していた。

男の気配はただ黒く、男の眼はただ玄くろい——
人間大に凝った三千大千世界の無尽の闇。スラッシュ・ダーク

視れば落ち行く感想を得る——果てなく、混沌とし過ぎていていっそ澄み切った始源深淵。ギンヌンガガフ

「此処一週間御挨拶に行けず、只自儘の目的に従い不法侵入した身の上に賜り下さった数々の御援助に対して深く御礼申し上げます」

「そんなこといいですよ」

「世界の連合から認められた治外法権地に正当な手段無く侵入した
罪科——とが

学園の長であらせられる貴殿の御差配あればこそ、拘束無く此処におれるのです。その大恩決して忘れませぬ」

「……………」

一体どのような精神けいけんを持てば、この原初の宇宙の様な、全の闇の様な中身から敬意や礼や情なさけと言う要素を湧き出て来るのか——

決して男性に慣れているとは言えない山田真耶を当初は怯えさせていたが、巧みな心遣いと言動と礼節で徐々に怯えさせず且つ自分に少々の親切を向ける様にした社交性。

一切の共感を拒絶する黒さだが、律儀で真つ当な教育を受けた者の様に見えた。

しかし——

学園長は思う。

なんてこと。なんていうことなの！ 織斑先生の弟さんは何が起きたの……ッ！

石動は思う。

男なのに。男であるのに。無能だと馬鹿にする気持ちや蔑視がまったく沸き上がらない。

川崎は思う。

人の形をしているのに何たる男だ。何たる様だ。誰が一体何をした。

三名の喉が鳴る。それは緊張の意を深く体感した事実を表す。それを開始の鳴鐘めいしょうとして本日の会談は始まった。

参加者は計六名。

IS学園学園長、轡木倉子。

IS委員会学園担当官、石動・シェーン。

未成年者略取誘拐特別捜査官、川崎千々岩。

一年一組副担任、山田真耶。

一年一組担任、織斑千冬。

そして帰還者リターナー、織斑一夏。

非正規参加者は二名。

IS開発者、篠ノ之束。

IS学園生徒会長、更識盾無。

促されるまま自堂は艶めく黒の本革の長椅子ソファに腰掛けた。

最上品の座り心地が尾骨から背筋に伝わる。柔らかさに揺れた腰を伸ばし、掌を膝に当て面談の姿勢をとる。

精緻な硬質硝子の机を挟んだ対面の長椅子には、右側から順に刑事の壮年男性、学園長の老年に近い壮年女性、官僚の壮年女性が座

している。

一人を除き、各々三十路を過ぎの働き盛りの齡である。脇に控える顔馴染の教諭二名は二十代だ。姉御前あねこぜが、二十五には届いていないはずだ。山田教諭は十代に見えるが、最低でも二十歳だろう。それぞれ全員が成人として扱われる年齢である。

しかし全員の年齢を足しても自堂の実年齢じつねんには到底届かない——思考切替。

自堂は真ん中の学園長に注目する。皺の有る顔が柔和に動いた。「改めてご紹介させていただきます。本学園の学園長を務めさせて頂いております。」

轡木倉子くわきくらこと申します」

洒脱な灰色のスーツ姿の女性は礼儀正しく申す。

「IS委員会特殊事件担当捜査官、石動いすのぎ・シェーンです」

朱のスーツに熟女の媚肉を隠した女性が潇洒な動作で自己を紹介する。名刺を拝領した。

「警視庁の川崎千々石かわさきちちわです」

力強い肉体の男性刑事が実直な態度で言う。警察手帳を差し出された。確認した。

「認識し（わかり）ました。改めまして織斑一夏に御座います」

再び自堂も紹介し、低頭する。

「お茶です」

山田教諭が自堂から順に紅茶を配る。四つ置かれ、脇に控えるのを確認すると轡木学園長は口を開いた。

「大変遅くなりましたが、織斑さん。わが校の生徒……篠ノ之箒さんとセシリア・オルコットさんを助けていただき有難うございます」
そう言つて深く頭を下げる。

謝礼。

あの日の事。

あの一週間前の、自堂が帰還した日。
少女二名に善を行なった日。

謎の機体に悪を行なった日。

そして再開の日――

組織を用いた仕儀に対して、武によって壊し、人を救う仕儀に対してこの方は礼を云っている。――理解した。

「……はい。頭を御上げ下さい轡木学園長殿。

……まがきものは。先日の兇器を以つての振る舞いは、一身上の都合と一心上の判断によるもの。

差出た真似と御咎めなくば重畳。感謝などして頂くに及びません」

――そう、あれは独善だ。あれが善果を齎もたらすと祈る事は出来る。

しかし練習用闘技場の中の少女等の身の安全を確保する為に、外へ危険を押し付けた。

善を独りにだけ向けた。

善因の悪果。

悪因の善果。

ヒトと自堂に善益を。ヒトと自堂に害悪を。

ヒトは兎も角、人世に広がらなければよいが……。

独善の思考を遮る声が上がった。

「その様に考えないでください。貴方は何も関係なく、何も分からない状況下でわが校の生徒たちを怪我一つなく助けてくださいました。それ以上は望めません」

教諭らしい高潔な言げん。全く正しき意見である。ヒトの分を考えた意見である。

しかし――いや、戒める。

「はつ。貴方の様な御美しく学び舎の長である女性に御感謝を戴くなど、過分の誉ほまれ、恐縮至極に御座います」

年下の女性の純粋な意思なのだ。甘んじて感受するのが妥当である。

「あらあら口のお上手い御方ですこと。それに誇って良いのですよ。貴方は尊い事をしたのですから」

実直な感想だ。轡木学園長は美しく老いている。醜く止まった自身とは大違いだ。後半の意見にだけは賛成できぬが。

「轡木学園長様を惑わす意図^{つもり}は決して。しかし御無礼を申し上げました。御詫び致します」

彼女は忘恩無恥で礼節を欠く人間では決してないのだろう。これ以上の感謝の押し合いは無為である。

「……………」

「……………」

朗らかに笑う轡木学園長の両隣の二名の沈黙が泳ぐ。壁際に控える教諭達が眼を合わせる。窓の外は晴れ晴れとしていた。

「あらあら横道にそれてしまいましたわね。それじゃあ織斑さん」

「は、何なりと」

「先程も聞いたとおり、川崎さんは警察の方です」

「はい」

警察……公の秩序と市民の安全を守る、国家の統治権に基づく行政機関。

「二年前の貴方の誘拐の日。貴方が消えてしまったその日。

——そこで何があったのかお聞きしたいとお申し出です」

川崎刑事殿は言葉を首肯で肯定する。

「そして石動さん。彼女はインフィニット・ストラトスと言う機械を倒置・管轄する国際機関のメンバーです」

「認識しております」

国際ＩＳ委員会……国家のＩＳ保有数や動きなどを監視する委員会。
^{アラスカ}

ＩＳ条約に基づいて設置された国際機関である——と姉御前に教えられた。

「貴方の劔^{ツルギ}なる兵器についてお話が聞きたたのお申し出です。出来れば手に入れるまでの経緯についても」

石動委員は清楚に首肯して肯定する。

自堂は一つの疑問を得る。

「——自堂の手荷物の中の資料や専門書では御不足でしたか」

基本とそこからの発展を抑えた資料として正しい物を揃えたつもりであったが、

「専門用語や製造方法、兵器としての歴史などの基本は抑えております。」

——しかし、基本からまったく外れた（……………）貴方のツルギについて我々は知りたいのです」

杞憂であった。

「成程。——石動委員殿、質問が御座います」

「はい」

「旧約新約の両聖書について違う点は見受けられましたか。西洋社会では基督教は文化基盤として最重要の位置を占めております故、一般常識として抑えておきたいのですが」

栗色の瞳が左上に動く。右利きの人間が場所・物などの記憶を再生する場合の所作だ。彼女は左手首の腕時計と右手のペンだから右利きと推理できる。

故に、彼女は資料等の文字情報で報告を受け取っている。

「……旧約ではカインの末路。ソロモン王の力。バベルの塔がツルギと推察できる記述などがこちらの聖書とは違いますわ。」

新約では、受胎告知が無い点、イエスの奇跡と伝道と末路はほぼ同じ内容でしたが、使徒の何人かが殉教ではなく鍛造となっております。特に目を引いたのがサロメの要求が首ではなく、戯曲のように愛でもって洗礼者ヨハネを——……のヨハネを求めていたという点です」

首肯。単に劔冑と言う単語を抜いただけでは話は合いそうに無い。こちらの世界の聖書を読むべきだ。教会へ行けば売っているだろうか。

「理解を得ました。」

ファンタジー・オブ・ウルス

劔冑夢想論のツルギの起源について。

ゼグラー社発の数打の素材について何か御考察、御意見は御座いますか？」

視線は左下に動いた。

「……合憎まだ読解と資料解釈が不十分でして、お力になれず申し訳御座いません」

誰かに口頭で指示された内容を話す石動委員。複製^{クローン}人体の此の世界での倫理、宗教的意見を聞きたかったが、応えられぬのでは致し方がない。

「有難う御座います。御兩人の御申し出は認識致しました。……轡木学園長様は、他に何か有りませぬか？」

中央に水を向ける。

「いいえ、私は是非ともお礼を言いたかったのです。それにどちらかと言えば聞くほうではなく教える方ですよ私は。——教師ですから」

皺の浮いた顔を破顔させる。見る者の心を落ち着かせる仕儀だ。

感服仕る。——違うか（……）。この場の誰も意識していない。

「なれば御説明せねばならぬでしょう。」

自堂の——織斑一夏と言う者が如何な原理と理由にて、彼の^か世界の漂流者と相成ったかを。漂流者^{フライングマン}、織斑一夏の生誕を——」

脳髓に張り付いて剥がれぬ記憶を引き出す。

恐怖。

慟哭。

憎悪。

納得。

諦観である記憶を舌に乗せる。

「結論から申し上げます、事故に御座います」

IS学園の一室で一つの作業がある。

それは盗聴と呼ばれる行為であり、『盗』の字が入っているから分かる様にモノを盗む行為である。

盗むのは形なき情報。声だ。

「ふん。本当におじいちゃん見たいな声音ねえ。それに口調も時代劇チック」

眩きをこぼすのは若い唇。少女の口だ。

薄暗がりの中、部分展開したISの機能により少女は盗聴を行っていた。

指定場所と規定理由以外でのISの稼働は違反行為であるが、少女は生徒会長権限の六文字ではなく、依頼の二文字を御題目に正々堂々——罰則を気にすることなく姑息に盗聴を行っている。

盗聴内容は無論、織斑一夏の言動である。

三人の学園の教諭がいるのだから、その者等から話す内容・感想を聞き出せば良い筈である。

しかし依頼者は言う。

『暗部の為の暗部である君の感想を聞きたい——』

その為に一字一句聞き逃さず、胸の内に浮かんだ感想を教えてくださいませんか』

裏側の学園長・轡木十蔵はそう依頼した。

内容が問題ではない。声から察せられる織斑一夏の中身（漆黒）を調べる、と命じているのだ。

「……簡単な依頼だからいいけどねえ……」

嘆息する。ただでさえ織斑一夏の現出により学園は大忙しの天手古舞い。はつきり言えば文句の一つも付きたくなる。

しかし依頼は依頼。遂行が第一。自身の心情など二の次、三の次だ。

盗聴は進む。通訳を呼んでくれ、と誰とも無く言いたくなる古臭く、馬鹿丁寧な、そして良く通る囁れた声を聞き続ける。

「——ん？」

背中が

震えた。

暗部の暗がりから這い寄り喉を触る——反吐が出る懐かしい感触だった。

耳には噎れた口調で、荒唐無稽な話をする織斑一夏の声が流れていた。

「ほう。ほうほう。ほうほうほう。HouhouhouhouHe
yheyho」

懈怠な音声を呟くのは、年甲斐もなく奇妙な装束の女。美姫の肢体に童女の衣服。更には兎の耳を模した機械仕掛けのカチューシャ。異装の一夏に負けない異装の女である。

隈が浮いた双眸は一つの画像を見入っている。空中投影された画像は、広々とした瀟洒な一室を現像していた。中心は総白髪 of 男である。

IS 学園の一室の光景である。あらゆる国家・組織から干渉されない学園を盗撮する行為は、無論という言葉をつけるまでもなく国際法違反の犯罪である。

そんなものは一毛程も気にした事がないのが彼女の自慢である。社会的に許されぬ自慢である。

しかし彼女の人格は、それに良心が咎めた事は無い——
そのような人格であり、鮮明な画像越しであっても感じる黒々しさを受け流す。

眉間に皺寄った張り詰めた凶相ではない。引き結んだ唇が特徴的の無表情である。

しかし黒々しい——それは彼女も重々感じている。感じてなお常の態度を崩さなかった。

彼女ならば、どのような聖者や覚者や外宇宙の神が眼前に現れたとしても一笑に伏すだろう。

異常者。きつとこの様な人種が世界を良くも悪くも動かして来た。彼女は、英雄や魔王と呼ばれる狂人と属性と方向性が違うだけで同類なのだろう。

「うつひゃー時代劇時代劇。ござるとかそうらへって言ってみてよ
いっくん！」

どちらかと言えば侍の時代ではなく、昭和初期の宮仕えの官吏の口調である。

まったく別人に変貌した幼馴染みの元少年に対しても彼女の認識は変わらない。

どうしようもなく——変わらない。

「ん？」

今、確かに自己隠蔽^{ステルス}の盗撮装置　いっくんストーカー　の方を注目したような——

不可能である。

ISでは無いにしても束謹製の装置の自己隠蔽機能はほぼ完全。人間の五感では感知する事は出来ない。

しかし何度か視線を向けている。確かにはつきりと極僅か、一秒にも満たない時間であるが、真っ直ぐに見つめている。

「……………」

決して届かぬ相手に、莞爾と笑みを贈った。

弟は訥々と語る。弁士のようにではなく、感情を込めず単純作業のようにただただ記憶を言葉として羅列している作業のように語る。

帽子を目深に被らされ、犯人達については何も分からないという。ヘッドフォンを取り付けられ、大音量の音楽しか聞いていなかったという。

手を膝の生地にくつつくくらい握り締めていて逃げる事もできなかったという。

顛こめかみ？に武器……銃を突き付けられていて、嘔吐しそうな恐怖に震えていたという。

犯人についてはまったく分からない。

しかし彼らは悪くない。

一夏が消え、漂流ながれた事については一切関係がない。

埒外の事象と体験についても同様だ。

だから——悪くないと——そんなっ、そんなっ！　そんな様になっ
て言うのか——！！

正直言っただけ立腹しなかったのは嘘になる。

一夏を誘拐しくさった悪漢どもを貶すでもなく、自分の身の上に生じた悲劇を哀れむでもなく、ただただ淡々と話す一夏に腹が立つた。

激昂した。

誘拐犯よりもその態度に憎しみと哀しみを胸に打たれた。

不動の姿勢のまま、胸中でマグマを滾らせる私は話を聞き続ける。

話は一夏が精神が限界に近づこうとしていたところだった——

——それは異形だったという。

後部ボンネットに左足を埋め、後部ガラスを粉碎して右足が車内に、座席を粉碎して侵入している異形だったという。後で知った（
……）ことらしい。

無論この時の一夏は前を向いていて、さらにガラスのシャワーを

浴びていたからその現象が見られたわけじゃない。

目隠しはその現象に驚いた誘拐犯の一人が暴発させた銃弾で帽子のつばが撃ち抜かれ、勢いのまま帽子は落ちたらしい。

久方ぶりに光に晒された目には、左肩を穿たれた運転手が目に入った……。そして声が聞こえた。

「……………な……………にごと……………だ、む……………らま……………さ……………」

今でも忘れる事の無いという、その単語。なまえ

“むらまさ”——

彼ら（・・・）は彼らの意思によらず車に着地した、と調べはついたと語る。

彼らは認識していなかった。

車の上に着地した事も右足の先に子供がいた事も——

だから次の瞬間、単純明快にして小説より奇きな偶然が起きた。

悪くない。

誰も悪くない。

全ては偶然。フレイト

誘拐犯も、時の激流から偶然足だけが外れて車の上に着地したむらまさも、織斑一夏も悪くない。

全ては運命。さだめ

だから誰も悪くない——と、そんな顔で語るなッ！！

脚。鋼鉄の脚。赤い甲鉄の脚だった。足の甲から刃の様な突起が生えている脚だった。

それを左肩越しに見たという。密着し今にもぶつかりそうな間近でそれを見たという。

足を埋めたむらまさは当然の帰結として、はまった足を引き抜いた（・・・・）。だから必然的に、突起が左脇に引っかつた

それは釣り針と魚のような図柄であつたと語る。

凄まじい金剛力で身体は引かれ、左手の平が膝を鬱血するほど握り締めていて脇を上げる事も出来ず体を車外に出された。

後半分が踏み潰された車を俯瞰した。

そして、それが最後の光景だつたという。

時流れに飲まれた――

そして――と弟は続ける。

告げる。

霞となつて消えた右手に鞘込めの西洋剣が逃げられていた。

写真を幾枚も取り、何処の何時の物が専門家に調べてもらった。

――いや、調べるまでもなかった。

その剣は特徴的であり、銘が刻まれてあり、その男の象徴となつていた物だつたから。

その男はルネサンス期のヨーロッパに誕生した無頼の医師。

最初の医学革命を為した、近代医学・医化学・科学・魔術の創始者。

中世から近代の医師を比較しても、誰一人として彼の到達地点へたどり着いた者はいないと歌われる達人。

スイスのトリスメギストウス。

――パラケルスス。

弟は告げる。

託宣を告げる神官ように。

罪科を吐露する咎人のように。

「そして飲まれた先。行き着いた先。漂流し（ながれ）た先。中世の欧州と云う場所。

此のアゾット剣を佩いた恩人がおられた時代。
其の場の、其の時の漂流者^{せかい}と成り果てました」

フライングマン。

飛行士、操縦士などを表す英単語であるが、中世の　さまよえる
オランダ人（Flying-dutchman）　やSFの異世界
や別時代に取り残された者を表す用語である。
後者の表す意味合いは常に一つ。

もう――家に帰れることはない。

突起から解放されて、息も出来ない状況でまず見たのは赤い騎影。

“村正”なる深紅の鎧士。

禍禍しい鬼面の武者姿。

それを記憶に焼き付けた。

次いで、痺れた右手を伸ばす。

赤い武者に。

海へ飛び込む車に。

割れた月に。

燃え行く寺で逃げ惑う武將に。

火刑にされた救国の魔女に。

金の為に殺された十字軍騎士に。

社会主義革命を失敗した政治家に。

アルプスを越える雷光に。

雷光を打ち破る暗黒大陸の覇者に。

見目麗しい北海の海賊に。

豪放磊落の態度の紫電改乗りに。

敵陣突破の撤退戦をする薩摩隼人に。

正義そのものとなった英雄に。

復讐を互いに為した男女に。

落ち行く金色こんじきの神に。

愛を想い、呪いによって飛翔する悪鬼に。

楽しい夢を見た子供の様に笑う白銀の悪魔に。

菩提樹下で悟りを得た目覚めた男に。

受胎天使に告示を受ける商人に。

磔にされ、血涙と慟哭と呪詛を上げる男に。

或いは――

必死の形相で空っぱの大型貨物容器コンテナに剣を振り下ろす実姉に――

しかし、

どれも、

届かない。

触れたのは、赤錆色。

感じたのは、血臭漂う草叢。

見たのは、異端審問で火刑と拷問刑となった酸鼻極まる死体の繚

乱。

暗黒中世の欧州大陸。

胃液と血潮香る絶叫が、死肉の原で訝した。

漂流者としての誕生の哭声を唄った。

慟哭。

それを――

屍を食^はんで肥太る蟲が、見下した目で往生際の良からぬ奴と見つめていた。

道を外れた者が独り、
在るだけだ。

その絶望は言葉に出来なかった。

温くなった紅茶を口にする。荒唐無稽に過ぎる話を語り終えた熱を冷ます。

五種の沈黙が流れる。

轡木学園長は深慮の沈黙を。

川崎刑事は呆気の沈黙を。

石動委員は停止の沈黙を。

山田教諭は驚駭の沈黙を。

――そして姉御前は瞋恚の態度をあらわした。

「ふざけるな！」

「巫山戯てはおりませぬ。真実は其れで、事實は此れで御座います」
胸座を掴み、自堂を引き摺り立たせる。硝子面に紅茶が零れ、陶器の縁が欠けた。

「お前がこうなった（・・・）んだ。こうも成り果てたんだ。そこに悪が無くてどこに罪が無いと言えるんだ」

「あれは天災です。此れは事故です。

「只在るがままのモノが動いて巻き込まれたヒトがぶつかつた――然り而^ししても結論は其れに御座います」

「ぎっ……誘拐犯はどう思う」

「織斑一夏を略取した罪は裁かれなければなりません、責めるべきはその罪科だけです」

「むらまさ」は、お前が乗せられた車に着地したぞ」

「偶然です。彼等は時の流れと云う激流に藻掻き、暴れ、偶然爪先がヒトに引つ掛かった……。悪意無き事故に御座います。」

“如何な荒唐無稽で信じられぬ真実であろうとも、可能性を除外し尽くし最後に残った物が真実である”——大英連邦の名探偵の言葉です」

「！」

両手で胸座を締め上げる。睨め付けるその眸は、顔は悲哀。

姉御前の気持ちは推量出来る。

身内が、例え悪意と害意なくとも巻き込まれ、負傷したのだ。

怒りを相手にぶつけ、慈しみを身内に注ぐが人間の仕儀^{ヒト}。

然り。

なればこそ我が身への叱責。

責め立てるべき者は世におらず、身内の感情は押し並べて（・・・

・）事故の被害者へ向く。

憎悪と瞋恚を悲哀の涙の洪水に吞ませ、残った物を吞みこませる。

「——織斑先生！ 落ち着いて下さい」

「そ、そうですよお！ 織斑先生。一夏さんを離して下さい」

身内（上司と同僚）が咎め、諫める。

「……………」

沈黙。静々と手を下ろす。肩より下がるまで静止して待つ。

「はあ……ふう……。——すまなかつた」

「いえ、——川崎刑事殿、石動委員殿、姉が失礼を致しました。愚

弟・織斑一夏が変わりに御詫び申し上げます」

毛羽立った絨毯の上に叩頭礼。

土下座の礼。

二対の視線が頭を刺す。

「おやめなさい織斑さん」

「気にしないで下さい」

「右に同じ。私どもは気にしておりませんわ」

許しを得て、頭を上げる。席に着く。当然ながら、場は乱れた。

「お話を続けられる雰囲気ではありませんね。」

——石動委員殿

「は、はい！」

上擦った声音で返事をする。

「身勝手な意見と重々承知しておりますが、貴方の御申出は午後からの劔胄の試験的運用の儀で叶えようと思いますが、宜しいでしょうか」

「はい。承りましたわ」

機敏な動作で頷く。

「諒解。——轡木学園長様」

「ええ、もうお昼ですし。会談は終了といたしましょう」

他の四人も頷く。自堂も頷いた。欠けを得た陶の茶器を元に戻す。受け皿に乗せる。

「御足労に報えず申し訳御座いません。」

——階下の部屋にて聞き耳を立てている御方と、

三十六度上方、半里先にて飛翔機械を操る御方も宜しいでしょうか？」

IS学園生徒会長にして暗部の為の暗部——更識家の才媛・

更識盾無の行動は迅速にして拙速だった。

IS開発者にして天災・篠ノ之束の行動は敏腕にして巧遅であった。

脇目もふらず学長室から二階分下、一部屋隣の空き教室から飛び出る。

機材や持ち込んだ私物は置いていく。

——逃げる逃げる逃げる！

盾無は兎に角離れる。授業中というのも無視して、廊下を突っ走る。

しかし、あの黒々とした気配が背に貼り付き逃れられない感覚がずっと背を這いずっていた。

うつひゃあっ、と戯けた悲鳴を上げ、束はニンジン型偵察機を操作。速度を犠牲に隠蔽性を上昇。ゆっくりとだが、猫に見つからぬ様に進む鼠の如く待避する。

やがて一夏の認識圏から離脱した。

「……………索敵範囲より装置の離脱^{ロスト}を確認。階下の者については補足を継続中。——如何に？」

「いえ、好奇心旺盛な生徒が聞き耳を立てていたのでしょうか。もうけっこうですよ」

「装置については？ 今から追跡致しますか」

「我々が行います。お気になさらずに」

確かに。事実だが荒唐無稽な話しかしていない。まだ自堂は学園を出る事は出来ない。

「諒解。次の行動を確認します」

山田教諭に向き直る。

「じゃあ、一夏さんの昼食を用意しましょう」

横目で姉御前を確認した後、自堂へ向く。姉御前は黙したまま窓の外を見つめている。川崎刑事は悩まし気に頭を掻き、石動委員は既に——思うに準備の為に退室済みである。

「織斑先生…………？」

「ああ、行こう…………」

「失礼を致しました」

礼をして退室。

ゆつくりと首肯する女性の姿を最後に、扉は閉じた。

足音が離れていくのを確認すると学園長はそつと溜息をついた。

「はあ……、織斑先生のおっしゃてたとおりでしたわ。本当に……
本当に……可哀想な子。」

まともな人の所作もできないなんて、なんて残酷」

ここ一週間の一夏の生活態度を見てみれば誰もが思う事がある。

一夏の生活。

夫とは別件の仕事。彼女はここ一週間の仕事はそれに費やしたと言つてもいい。

あくまで生活態度。彼の行動の裏を見張るのではない。

あくまで観察。彼の癖や習慣を知るためのものだ。

そして結論がでた。

織斑一夏は——異常だ。

真つ当で律儀——それは正しい。

黒々しく深遠——それも正しい。

しかし、今の今まで総白髪に成程の労苦と苦痛を味わった人間が、漸く安心できる姉の下へ辿り着いたというのに泣く事もしない。

引き攣った表情をした。

唇が震え、目尻が戦慄いた。

それでも涙は出なかった。

涙が枯れ果てたとは違う。心でしかと泣いている。

それに姉を慈しみながら、他人に敬意と申し訳なさを謝罪した。

彼は己を偽っていない。真実真摯に人を敬った。姉にだけ向けるべき心を他人にも向けた。

苦勞をした人間が傍若無人に振舞つていいという法はない。

しかし再会の儀の最中ならば、少々の傍若無人は万人が認める。身も蓋もなく泣き喚く。

伏せて只管に静かに涙を零す。

抱きしめ合い愛を交わす。

百人中九十九人がそうするだろう。

だが真つ当で律儀で誠意と敬意が溢れる態度を、再会の最中에서도続けるのはおかし過ぎる。異常である。

地獄から抜け出たまともな人の所作ではない。それが心から行える事もまともではない。

健全な態度であるが故に、彼のまともではない部分が浮き彫りになっている。

——しかし、それが人に害成すものではないから余計に始末に負えない。

正しい態度と礼節を心得ている事は、正しい（・・・）事である。彼は正しい事をしている。

——それが、

——その食い違いが——
何時しか影を墮とす。

「これ以上暗がりに、これ以上黒く染まることのないよう——」
祈る。

ふと、気付いた。

「あら？」

陶の茶器を持ち上げる。一夏が使用し、千冬が激高した際に欠けが生じた筈だ。

老いた耳だがその澄んだ音をはっきり耳にしている。

しかし茶器に欠けはない。それどころか、僅かに残っていた中身

は何処に消えた——？

首を傾げる轡木倉子の足元に、一枚の茶葉が落ちていた。

姉御前は山田教諭と並ぶ。自堂はその背の横に並ぶ。連れ合いの如く並ぶ。廊下を歩き出す。

「本日の場所は何処いすこに御座いますか」

食道は生徒と教員が利用する場所である。早朝の時間なら兎も角、昼間は自堂は利用する事は出来ない。

「えーと、職員寮の一室でお弁当をいただきましたしょう」

「諒解。種類は何弁当ですか？」

「鯖の味噌煮弁当です」

「味噌との相性が良好かと」

「ええ本当に美味しいんですよ」

歩きながら会話をする自堂等の前に人影。長く伸びた黒髪の立ち姿。

箒嬢。

オルコットの姉御前は連れ立っていない。

力強い眼差しは、姉御前を向いている。

「——？ どうした篠ノ之。まだ昼休みにはなっていないが」

「織斑先生」

一言、告げる。

決意秘めた凜冽たる軍声で、

「私を——私を使ってください！」

場所とも言えない所で、その時とも言えない時間帯に、新聞を読む事務員らしき男。

紫。

紫は眼鏡越しに文字を辿る。

『紅椿破壊』 『篠ノ之箒安否不明』 『織斑一夏消息不明』

T O B E C O N T I N U E D .

第三編／生活騎・下（後書き）

轡木倉子。石動シェーン。川崎千々岩。

以上三名、会談のためのオリキャラ。

表向きの学園長は名前から十蔵から名前を取りました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3727y/>

創甲道化織鐵

2011年12月1日15時56分発行